

慶應義塾大学経済学部研究プロジェクト
(2013年度)

文学報国詩集

経済学部4年

原田龍一

一號一面

親邦の友を迎ふ

尾崎喜八

秋青く天また高い明治節のあの日

胸に熙熙たる菊花をつけて

かたく契つた血脈のぬくみが

今もたなぞに感じられる。

萬感を托して見合せたまなざしの

意味するものを我等は生きた。

あれからもうやがて一年

中國敢然と劍を執つて立ち

ビルマ戦雲の只中に獨立する時

ここに再び軍國の夏の帝都に

親邦文化の最も遅しき代表を迎へる。

まことに男子三日會はざれば刮目して見るべく

中國、滿洲國の諸先生

その提げ來れる抱負と經綸の

いよいよ切實高邁なるを想はせる。

文學日本また茲にのぼすべきの議

元より積んで山の如くである。

タイ、ビルマ、フィリツピン、ジャワの文壇

又遙かに熱烈の願望と聲援とを寄せ來たる。

盛興おもふべく

成果期して待つべきである。

よろしく肝膽を輸し腹心を披いて

東西に交流し南北に貫通する

大東亞新文化の創造に

一大展開の巨歩を進めようではないか。

一號四面

さざれ石をえて

佐藤一英

やは風の多摩の川原のあさの陽に

拾ひしはこれ、さざれ石、低く平たく
やすらげく、文机のへにしづもれり
ひさかたの氣のこもらへば、蒼み深みて、
とどろゆく流れのなかに身すすげば
ひかりやはらぎ、雲がたに傷うすれたり
時ありて、消えがての傷はほほゑみ
いにしへの日の聖りめき、くちうごかして、
解きがたく、またこころひく言葉あり
息しづかなるこれや石、わがわづらひを
八雲立つ泉のほとりみそぎして
いはでもとほり、まつろはすえにしある石

二號三面

友遠方より來る

ようこそ……

胸章(きやうしやう)の桃色リボンが朝風にゆらめく
はち切れるやうな喜びで、出迎への
久米局長の聲が少し震(ふる)える
ようこそ……

盛(せい) 夏八月二十二日、第二回大東亞文學者大會各國文學代表東京驛(えき)着

——友(とも) 遠(えん) 方より來る亦(また) 樂しからずや

滿洲(しう) から、中國から、蒙疆(もうきやう) から

見交す眼(め)と眼(め)、心と心

道(みち) はたゞ一つ

『アジアは一なり』

戦ふ文學者の叡智と決意と實踐と

この朝、光みちにあふれたり

佐佐(ささ) 木信綱(のぶつな) 先(せん) 生はこの喜(よろこ)びを詠む

海こえてよき友(とも) 來る手とりかはしはからむ大亞細亞の爲に

もゆる日に來竹桃の花はもゆ丹き心に語(かた)らはむいざ

あじあ人の亞細亞たるべく今この秋

ひとつ心に一つちからに

四號一面
奈良にて

青丹よし奈良の都の
名にしおう春日の
森にすみ古りし汝ら
鹿よとほつみをやの
うた心あけくれに
慕ひ仰ぎて哀れまた
汝もなりしか歌人と
言靈の幸ふところ
敷島の國に生れし
吾れもまた旅の歌人
うち連れる彼の
友どちは遙行くも
海山越えて訪れし
唐國の歌のまろうど
咲き匂ふ花一輪は
關露てふ閨秀にして
長江の流れも近き
上海のさとより來る
さてはまた大陸の北
新しき希望に燃ゆる
滿洲の若き作家や草深き邊境の地なる
蒙疆（きやう）の奥より出でて
旅枕重ねるかづも
いと繁き友も混れば
南なる蓬萊の島より
黒潮の海のり越えて
馳せつどへる四人も
汝とまた縁もふかき
高麗の街より來ぬる
幾たりの歌人もあり
來よ近く語れ親しく
吾が友よ古き言葉を
あるはまた昨日今日

かたみに燃ゆる胸血潮
戦のさなかにありて
我はをも何をか爲さん

四號二面

送る

山口誓子

古都にして膝つきあはず天の川

天の川戦さを共に想うとき

卿（きみ）等去るあとに日本の天の川

天の川卿等の船車遠ざかる

川田瑞穂先生に

使ひせし中華の朋と天の川

東大寺にて

作者不詳

ここにきて

心しづかに

ぬかづけは

あな嬉し

光もさやに

み佛の

笑ませ給ひぬ

石だゝみ

影もすがしく

旅空に

ふむ足かろし

別れの集ひ

作者不詳

枝をつけ影を宿せる
この巨き幹の邊りに
肩をよせ微笑みてイラ
亘ならぬ道の石など
敷きけるはこれ
日滿華三國のひと
過ぐる日は皇都につどひ
一つなる目あてと望みに
火と燃ゆる思ひを
さらけ語りあひ
大みいくさに勝たばや
とひたぶるに策を練り
大東亞十億の民
百年の重き鎖に
つながれし汚辱を雪ぎ
新しき光りに興る
大アジヤ築くべく
名も男々し大東亞
文學者決戰會議を
いとなみし精銳潑刺
の文學
降り注ぐ光を浴びて
もろ共に皇都をたち
昨日 今日 西の都を
うち連れて訪れめぐり
我が古き文化の跡に
とりよろふくさぐさ
の實をいたゞきて
今ははや西東はた
北南に別れんとする
この道よ荷を降ろし
また新なる荷を負へ
る大アジヤ復興の土
を歩ませよ恙なく

この巨き幹と枝
憩はせよ今日の如くに
明日はまた汝が蔭に
かの十億の民を餘さず
いざさらば御機嫌やう
京都丸山公園のこの集ひ
末ながく幸多かれよ
(寫眞は京都兜山公園にて)

五號一面

軍事保護院獻納詩

神の征矢

安藤一郎

一

神武(む)の帝の御弓より
肇國の光射し出でぬ
大和島根(ね)の日本(につぼん)は
アジヤを守る弓なるぞ

二

いまや強弓引き紋り
四方に放(はな)つ破(は)邪の征矢
太平洋(やう)の浪(なみ)を切り
將ヒマラヤの雲を越ゆ

三

猛(たけ)き男の子ら戎衣着て
歸(かへ)らじとこそ誓(ちか)ふなれ
仇なす敵(てき)を撃ち碎き
數多(た)歸(かへ)らぬ矢となりし

四

詔(みこと)畏(かしこ)み我等みな
舉りて送(おく)らん神の征矢

金鵝輝（かざや）き身に浴（あ）びて
勇（いさ）みて立たん戦（たゝか）はん

日中

岡崎清一郎

父の膝は美しい。

私はすっかり安らかになった。

五號二面

軍事保護院獻納詩

軍事保護院・陸軍省・海軍省選定

大アジア獅子吼の歌

大木惇夫

一

東（ひむかし）の日出づる國の

日の皇子（みこ）の御民（みたみ）ぞわれら

御銚（みほこ）とりすでに起（た）ちたり

虐（しひた）げてアジアをみだる

よこしまの夷（ゑみし）を撃（う）つと

二

みいくさや大義（たいぎ）のつるぎ

北の果（はて）、南（みなみ）の際（きは）に

かちどきを高くあげたり

苦しめるアジアの民を

さががけて解き放（はな）たんと

三

あけぼのぞよきおとづれぞ

荒野なる眠（ねむ）れる獅子（しし）よ

目ざめよや、吼（ほ）えよ奮（へ）よ

いざ擧（こぞ）れアジアは一（ひと）つ

日をしるす御旗（みはた）のもとに

四

わが呼（よ）ぶは十億（おく）の民
鐵（てつ）あらばそを持ちて起（た）て
石あらばそをとりて打て
とりかへせアジアのアジヤ
もろ共も榮（さか）えのために

五

八紘宇（あめのしたいへ）と爲（な）すべき
すめ御稜威（みいつ）すめ御光（みひかり）に
わざわひの雲はらふまで
神怒（かみいか）るアジアの敵（てき）を
撃（う）ち撃ちて撃ちてしやまむ

六號一面

北溟孤島の華

—アツツ島守備隊の最後を讀ふ—

梶浦正之

山容（よう）改（あらた）まるといふ
敵（てき）の執拗（しつえう）な艦砲（かんほう）も眠（ねむ）り
炊（すゐ）事の焚火もない
漆黒（しつこく）の闇に
くつきりと象嵌（ぞうがん）された北斗（と）七星
勇（ゆう）士たちは塹壕（こんがう）の砦（とりで）に揃ひ
貧しい最後の晚餐（ばんさん）を始（はじ）めた
貯（しほ）の鹽（しほ）鱒（ます）を噛り
部下の冷酒を受（う）け
何氣なく鉦をはづした部隊長の
その手に觸（ふ）れたものは
出陣（ちん）の際（さい）肌（はだ）につけた父母の墓土（はかつち）
あゝそれは静（しづ）かにも體溫に暖（あた）まつてゐた
アリュウシヤンの五月の寒（かん）風は

浮ぶ微笑をさらったが
兵士らは鯨の骨(ほね)を振(ふ)りながら
凍る顎鬚(あごひげ)をなでながら
昨日まで荷揚(にあ)げの孤(こも)さへ昇(あ)がれた部隊長
『われらの親父』の温容(をんよう)に泣(な)きながら誓(ちか)つた草と苔とのからみ
あふツンドラに
いちはやく桃色に春を呼ぶといふ
あのヒメエヅコザクラの可憐(かれん)な花も未だなかつた
急(きふ)坂に汚れた戒衣(かいい)をなびかせ
高臺(たい)に攀(は)ち集(あ)つた決意の貌々(ぼうぐ) ……
兵士らは白い息吹(いき)きに仰(あ)ぎ見た
岩頭(とう)に屹然(いつぜん)と立つ
山崎(さき)部隊長の雄姿(ゆうし)
『……他に策(さく)なきにあらざるも萬一を僥倖(りやう)し 武(ぶ)人の名を汚すべきにあらず
……』
凍(こ)たる玉碎(さい)突(とつ)撃(げき)の訓(くん)示(し)！
全員(ぜんいん)肅(しゆく)然(ぜん)と
遙(はる)かに皇居(こうきょ)を拜(はい)し
聖壽(せいじゆ)萬歳(ばんざい)を奉唱(ほうてい)しやうした
天空(てんくう)を燦(ざん)めく星座(せいざ)はうつり
折(を)り來(き)つた吹雪(ふぶき)に
見え隠(か)れする姿(すがた)のなかに
『今夜(こんや)の激襲(げきしゆ)を神(かみ)も照覽(せうらん)あれ……』
電(でん)鍵(かぎ)は烈(れつ)しく凍(こ)る空氣(くわい)を貫(つ)いて
波濤(はたう)煙(えん)る祖(そ)國(こく)の空(そら)へ傳(つた)へられた一瞬(いつしゆん)
一塊(くわい)の焰(ほのほ)が後方(こうぼう)の丘(かみ)の幕(まく)を破(やぶ)り
一齊(いつせい)の銃聲(じゆせい)が靜(せい)寂(じやく)を破(やぶ)つた
傷(やぶ)病兵(びやうへい)が自決(じけつ)したのだ！
それを合圖(あひづ)に 忽(たち)ち
巨大(こっけい)な渦卷(うづまき)が
音(ね)と光(ひかり)の巨(きよ)大な渦卷(うづまき)が
絶海(ぜつかい)の孤(こ)島(しま)を覆(おほ)ひつくした
炸裂(さくれつ)する爆彈(ばくだん)のなかへ
白刃(はくへん)の束(たば)が閃(ひら)めき飛(と)んだ
手榴彈(りうだん)の飛沫(しぶき)のなかへ
喊聲(かんせい)の嵐(あらし)がまぢつた

燒夷彈（せういだん）の火焰（えん）がツンドラをなめ
匍松（はひまつ）のやうに迫（せま）る無（む）数の戦車へ
たぎる肉弾（にくだん）が折り重なって向つた
たゞ 天地海陸（りく） 鳴動の最中（さなか）
アツツの孤（こ）島に悲壯（ひさう）な華（はな）は開（ひら）いた
風速四十米 烈（れつ）風なほもつり
吹雪は夜をこめて猛り狂（くる）つた
やがて北溟の涯
短（みじか）い白夜は仄かにも暁（あかつき）をつげ
皚々たる白雪を血（ち）に染めた
あゝ 二千有（いう）餘の日の丸の旗（はた）は
昇る朝日とともに
祖（そ）國一億（おく）の胸ぬちに翻つた

七號一面

今日の日の喜び

千家元曆

東亞（あ）を守護（ご）する偉（ゐ）大な使命（しめい）の下に
感激（かんげき）を胸（むね）一杯（ばい）にして今日の我は有り
同胞（ほう）の天晴（は）れな英雄（えいゆう）的勇武（ゆうぶ）を讃へて涙（なみだ）し
心熱（ねつ）し昂り生くるは幸なり
誠忠（せいちゆう）と美（び）に輝（か）やく國史（し）を思ひ
御國の光榮と偉（ゐ）大を思ひ
畏（かしこ）くも大君の
戦線の將士と國民と
還らざる幾（いく）萬の忠誠（ちゆうせい）の英靈（えいれい）と
其（そ）の遺族（ゐぞく）の上に
御心を置（お）かせ給（たま）ふ
聖恩（せいおん）に感泣（かんきふ）し
神聖（せい）な日本（にっぽん） 天皇を戴く民の
無（む）上の勸喜（くはんき）は極（きは）まりなし
數多（た）度び戦勝（しよう）を傳（つた）へ來る
忠節（ちうせつ）の勇（ゆう）士の故（こ）國を救（すく）ふ匹敵（てき）せざる敢闘（か
んとう）と

國民の不屈(くつ)な熱誠(ねつせい)に感奮(かんふん)して
今日の我れはあり

永(なが)く東亞(あ)の民を迫害(はくがい)虐げ
虐殺(ぎやくさつ)、掠奪(りやくだつ)を擅(た)にその民を無(む)力(りき)たらしめし
天意(てんい)に反(はん)く米英(べいえい)の邪(よこ)を制(せい)して
解放(かいほう)の喜(よろこ)びと惠(めぐ)みを與(あた)へ
東亞(あ)の民の覺(かく)醒(せい)を激勵(げきれい)して
獨(どく)立(た)を決行(けつぎ)せしめ
共に困(こん)苦(く)に耐(た)へ義憤(ぎふん)に燃(も)へて戦(せん)ふ
大(だい)なる正義(ぎ)の力(りき)よ

時に若(わか)き學徒(がくどう)の新銳(しんえい)を加(くは)へて
錦(きん)上(じやう)更(さら)に花(はな)を添(そ)へ
豪威(がうゐ)雙(た)び無(な)き堅固(けんこ)な新(しん)しい陣容(ぢんよう)成(な)り
必勝(ひつしょう)の信念(しんねん)を固(かた)めて敵(てき)に迫(せま)る
國民(こくみん)は親愛(あい)と感謝(かんしゃ)に心(こころ)を籠(かこ)めて熱狂(ねつきやう)してをくる
少壯(せうさう)血(けつ)氣(き)の人々(ひと)よ、國家(こくが)の任(にん)に盡(た)して下(くだ)さい

外敵(がいてき)を撃(う)ち東亞(あ)を守護(ご)し
東亞(あ)を抱擁(ほうよう)する日本(にっぽん)の
偉(ゐ)大な使命(しめい)の樂(たの)しさよ
祖(そ)國(こく)に烈々(れつ々)たる劍(けん)と筆(ふで)あり
我等(われら)報國(ほうこく)の心(こころ)血(けつ)を文(ぶん)に注(つ)いで
感(かん)に堪(た)へず今日(けふ)に有(あ)り

八號(はちごう)二面(にめん)

みのり
谷馨(たにかほ)

皇神(すめがみ)の宇豆乃比(うづのひ)奉(まつ)り依(よ)さしける巖(いはし)穗(ほ)
召(め)さすたかひの日に
小田城址(おだじ)覓(み)めつつ來(きた)り内濠(うちゑ)の稔(みのり)に對(むか)ふ言(こと)ひかてなく
常陸野(つらつちの)を埋(うづ)めわたしてや果(は)の空(そら)に著(つ)きぬし稔(みのり)おもほゆ
常陸野(つらつちの)の旅(たび)ゆかへりきて思(おも)ひふかし田(た)に立(た)てる大(だい)方をみななりしこと

たたかひを勝ち徹(とほ)らすと米(よね)つくり身もたな知らず姫(おうな)の伴(とも)も

朝夕に米(よね)いただくも大君のめぐみと泣ける親房東雄(あづまを)

東北の村にて

小笠原文夫

刈り干せる廣(くわう)表無(む)邊の田の面のこのしづけさに胸(むね)あつく立つ
新稲とをろがみ觸(ふ)るる穂(ほ)の重さただに手にしをり旅(たび)人われは
さらさらと豊の稔りのわが稲田しづけくあれや彈(だん)丸もさやらず
老いたるが女子供(ども)が穫りにける今年の稲もよくできにけり
この村の苗代小田にまばら立つ垂穂(ほ)の稲は重重とせり

新穀感謝詠

鹿兒島壽藏

大宮の玉田の稲をみてづから刈りますだにもかしこさろかも
神の邊の瑞のくしびと生ひ出でし新種(しゆ)稲を荒垣(あらがき)と名づけられたり
新嘗の淨き祭(まつり)に奠稻(くましね)をささげぬかづくひたぶる(こころ)
傾壞(きやうえ)なき國のもとると豊稔りあかきおもひに禮(みや)をこそせめ
水漬(づく)田に腰(こし)さへ浸り刈る見れば神の業かもこの現實は

八號三面

新穀感謝の祈り

江間章子

たゝかひいよゝ深(ふか)み行く秋

一億(おく)同胞(はう)こゝろをあらたにしてたゝかひの姿(すがた)に身(み)をかた
めるとき

豊穰の秋を迎(むか)へて

いま國土は黄金色の波(なみ)に揺れてゐる

神前に有難(かた)い新穀(こく)をそなへて

去年とおなじ豊作に恵(めぐ)まれたことをみくにを遠(とほ)く離(はな)れてたゝかふ
防人に先づ告(つ)げたい
瘡癘の土地を切りひらいて農園(ゑん)をつくり糧(かて)を得(え)ながらたゝかつてゐ
るといふ防人に
みくにをあげてたゝへるこの新穀(こく)感謝(かんしゃ)のよろこびを告(つ)げたい
きつと防人たちはたゝかひながら故(こ)國の秋の稔りを心配(はい)してゐるにちがひな
いから

尊(たふと)い新穀(こく)のかげにかくれてゐるお百姓さんの御苦労に心から有難(かた)
うを云(い)はう
恵(めぐ)まれた豊穰の秋を迎(むか)へてみ民われら米英(べいえい)必滅(ひつめつ)
の炎と燃える
拜んで新穀(こく)をいたゞかう
けふ生きてたゝかふ糧(かて)に

里の賑
竹村俊郎

輻輳たる

車(くるま)の響

紅葉(もみぢ)る秋の村山里に

八束足穂(やつかたりほ)を取(と)り入るる

輻輳たる

車(くるま)の響

人の咳(しはぶき)

蹄(ひづめ)の音(ね)雄(を)牛の呻吟(うめき)

積(つ)み入れし千稻(ちしね)八千稻(やちね)

光(かがや)ける千穎(ちかひ)八百穎(やおかひ)

泥(ひお)掻きし田族(たから)が果報(むくい)

御年(みとし)の神の賜物(たまもの)ぞ

御(み)年の神に

巖(いか)し初穂(ほ)を

清き御食(みたし)を

先づ奉(たてまつ)れ

御（み）年の神に奉（まつ）りなば
皇軍（みいくさ）のため獻（たてまつ）れ
取（と）り入るる千稻八千稻
下（した）垂（た）るる千穎八百穎
皇軍のため 國（くに）のため
田族（たから）の生（う）める
新（にい）しき血（ち）
新しき彈丸（たま）ぞ

御（み）年の神に奉（たてまつ）り
皇軍のため獻（たてまつ）り
かくしこそ村里善（よ）けれ
かくしこそ里人吾等
慎（つゝし）みて新嘗（にひなへ）の夕餉につかむ
拜（おろが）みて白砂の箸な乗（を）りなむ
遠（とほ）つ代の齊庭（ゆには）忍びつ
皇神（すめかみ）の恩惠（めぐみ）畏（かしこ）み

輻輳たる

車（くるま）の響

里人の聲 馬の嘶

運び入る千穎八百穎

御（み）年の末（すゑ）の村里罩むる

御（み）年終（をは）りの里の賑（にぎはひ）

榮（さか）ゆる御（み）代の兆（しるし）にこそ

勝たむ皇國（みくに）の影（すがた）にこそ

日本の米

劉寒吉

青い田は太陽の下にあつた。

青い田は私の立つてゐる丘の麗から初まり

銀色にひかる川を越え

村落の林だけを残して

地上を一面に緑いろの繪刷毛で塗りつぶし
とほくの山脈のあたりまでつづいてゐた。
豊かな日本の田園を俯瞰して
涙がこぼれるやうにうれしかった。

閃閃と稻妻が空をきり

樹木を鳴らし

電柱を倒して

暴風が猛り狂った晩があつた。

貧しい食卓を圍んでゐた私の家族は

不安氣な吐息をついて

今年の米は大丈夫だらうかと話あつた。

そのやうな日と夜が何べんかあつた。

黄金色の穂はふかぶかと垂れ

微風が田の面に波をたてて流れると

奉仕隊の旗がひるがへり

収穫の勸喜がばくはつする。

私は大きな稻束をかついで歩きながら

胸の中でつぶやいてゐた。

日本は大丈夫だ。

日本は大丈夫だ。

新しい米がとれる。

新しい米がとれても

私はうどんをすすり芋をくひ

小麥粉團子の味噌汁をたべるだらう。

戦つてゐる日本の大切な米だ。

もつたいなくてたべられはしない。

せめて一握の新米を神棚に供へ

私はやうやうやくしく豊年を感謝しやう。

聖恩旗の下に

深尾須磨子

—明治神宮國民鍊成大會によせて—

國旗(き) 塔(たふ) 高く
雲を薙ぎ拂(はら) ふ日章旗(しやうき)
大戦果(くわ) を呑んで
いよよおごそかな晩(ばん) 秋の空
今を匂ふ黄菊(きく) 白菊(きく) の心にくさよ

ああ 聖恩(せいおん) の旗(はた) の下
決戦の南に北に呼(こ) 應して
おらび猛ふ神々の聲(こゑ) に
大地を壓(あつ) して進(す) る 鋼鐵(かうてつ) の列(れつ)
整(せい) 然とまた潑刺(はつらつ) と
渦巻き躍動する鍛鐵(てつ) の大群像(ぐんぞう)
ここに分裂(れつ) し更(かう) 新する民族(ぞく) の細胞(さいほう)
白熱(ねつ) し灼熱(ねつ) する必勝(ひつしやう) の坩堝
ああ 更(かう) 生亞(あ) 細亞(あ) の大祭典(さいてん)

今日に生きる榮(えい) 光の座(ざ) に
一介(かい) の詩(し) 人は涙(なみだ) して亡き母を呼び
萬雷(らい) 轟(とろ) く高高原のどよめきに傾聴(けいちやう) する
やがて彼方の國旗(き) 塔(たふ)
一きは高く鳴りはためく日章旗(しやうき) に和して
めでたくも歌(うた) ふ六友邦(いうはう) の旗(はた)

氣魄

豊田三郎

分列(れつ) 行進(しん) をみつめてゐると涙(なみだ) が湧いてきてどう仕様(やう) も
なかつた戦場に劣(おと) らぬ氣魄(はく) が犇々と感じられて、祖(そ) 國は滅びずとい
ふ感(かん) 動に胸(むね) をさかれた。私はこの時ほど『君ヶ代』や『海ゆかば』を魂の
底(そこ) から高らかに唱つたことはない。

九號一面

大東亞建設賦

井上康文

その亞細亞を愛する心は同じ
その國を愛する心は同じ
大東亞各國代表相集り
熱誠もつてその心を表明せり。

大東亞の安定を確保し
共存共榮の秩序を建設す
これ即ち聖戰の大義なり
亞細亞民族の傳統に生き
各々其の所を得て自主獨立し
共に助け、敦睦の實を擧げ
萬邦の交誼を篤うし
普く文化を交流、昂揚すること
これ大東亞民族の唯一の道なり。

米英の暴戾なる擄取を根絶し
大東亞本然の姿に生きる日の
などか遠きにあらん
大東亞各國の協力は
積年の禍根を免除して
大東亞の繁榮を増進すべし。

この大いなる戦ひの砲火の中に
新しき東亞は建設されつゝあり
大東亞の結集、十億の要望は
各國代表の熱血の叫びによりて
ここに昂揚せられたり。

さあれ、戦ひまさに苛烈なり
大東亞十億の民相協和し
ひたすら戦争完遂に邁進すべき秋
敵撃滅の朝、勝利の朝
輝きわたる大東亞の朝
そは米英の闇を拂ひて明けん。

その大東亞を愛する心は同じ
その民族を愛する心は同じ
菊薫る日比谷原頭
國民大會の歡聲、天に冲せり。

大東亞會議

市川御舟

神集ひ神はかる日や菊薫る
昇る日と十億の民火の塊に
六の頬の瑞穂に肥えて血の沸る
神風や六國の旗聲を揚ぐ
地軸今大きく奮ひ廻りけり

ブーゲンビル第二次航空戦の大戦果に
二年目の八日や戦意また新らた

大東亞共同宣言を讃へて

星野麥人

永久に菊薫らんと宣る日かな
大東亞こゝに固めて天高し
よろこびを秋の高きに擧ぐる也
秋天に日はひとつ十億の心もひとつ
けふの榮野山の錦はりわたす

九號二面

南海の勇士を偲びて

佐藤一英

大八洲の峯々一齋(せい)に紅葉(もみぢ)するゆふべ
黒潮(くろしほ)の流れ一入冷たさを増(ま)せる夕
瑞穂(みづほ)の名にたがはず稔り豊かに

村々の穀倉(こくくら)に香んばしく賑(にぎ)はふとき
町々の工場の物音澄んで

窓々(まど／＼)の明りの冴(さ)えゆくとき
一億國民のことごとくが襟をかき合すことあり

そはあはたゞしく來れる時雨のためにはあらず

突(とつ)如襟(えり)元をおそひし北風のためにもあらず

そは實に大皇艦(みふね)南海(かい)にすゝめられてこのかたかつてなく

また世界(かい)の戦史(し)上類なき大戦果(くわ)をまさ耳に聞きしが故(ゆゑ)なり

いな、いな、いまはなき山本提督(とく)によつて築(きづ)かれし

わが海(かい)軍航(かう)空部隊のますらをごころは亡びず

新らしき古賀提督(とく)のもとに燦たり

納富(なふとみ)大尉(ゐ)はじめ四名の中隊長

大尉(ゐ)らに指揮(しき)されし二十機(き)のつはものは

みづからを弾とかへて南海(かい)にかへらずなりぬ

敵(てき)戦艦(かん)四隻(せき)大小巡洋艦(やうかん)十隻(せき)敵(てき)兵力

三萬を越ゆる仇を

海底(かいてい)の藻屑(くづ)となせし代りに

身(み)みづからを弾と變へたり

大和の子、誰(だれ)か襟(えり)を正さざらむや

頭(あたま)を垂れて御靈に祈(いの)ることなからむや

われ自らも御靈につゞかむと決意を新たにせざらむや

大八洲島の島々に秋漸(やうや)く深(ふか)まらむとするとき

南海(かい)の島々にさらに熱(ねつ)氣加(くは)はらむとするとき

仇(あだ)もの久しき反抗(はんかう)を身(み)をもつてさゝへ

一瞬(しゆん)にして彼らの主力を海底(かいてい)にしづむ

誰(たれ)か感謝(かんしゃ)し、感奮(かんふん)せざらむや

われら識る冷たさの極(きは)みに熱さの極(きは)みあるを

死(し)のはてに生はさらにかがやくを

秋高らかに黄菊(きく)白菊(きく)しづかなる夕

南海(かい)の勇(ゆう)士を偲びて思ひ深(ふか)し

(昭和十八年十一月九日しるし、同じく十日ARKの希望により、第二次の分を加へ數字をあらため、同夜放送さる。ブーゲンビルの戦ひは第五次を數へ戦果はさらにあがりをれど、いまはこのまゝ活字にとゞむることゝはしつ。)

ブーゲンビル沖の戦ひ

井上誠

一

きくならくみんなみの海
たぎつ波(なみ)あわ立つと云(い)ふ
寄(よ)する艦(ふね)敵(あだ)とし見れば
生命さへものと思はず
猛き子(まうこ)は行きてかへらず。

曉(あかつき)しばしかそけき中に
飛(と)び行きし男の子の群に
勝鬨(かちど)はきけども
雲(くも)かともかへらぬ子(こ)はも
いとほしみ涙(なみだ)も流る。

男の子(おとこ)らぞ生命知(し)らずも
君(きみ)がためかへりみすなく
疾風(はやて)ともほむらに入らば
ほむらともその身(み)をなしぬ
敵(てき)の艦(かん)焼(や)きつくすほむらとも
神(かみ)のほむらと。

二

海洋(うみ)わだつみにい照(て)る日(ひ)の下
あるはまたスクール(すくーる)の激(はげ)しき真中(まんなか)
狂(くる)ひなきねらひに入らば
鯨魚(くじら)いさな取(と)り海(うみ)に漬(ひ)くとも
敵(てき)の艦(かん)射(い)て取(と)るものを。

猛々(まうまう)し日本男(にっぽんおとこ)の子(こ)

願（ねが）ひごと神の御業に
そひまつるほまれと知（し）れば
はゝそはの母はおろがみ
ちゝのみの父はうなづく。

きくならくソロモンの海

敵（てき）寄（よ）するブーゲンビルに
國護（まも）り亞（あ）細亞（あ）を護（まも）る
巖なす固（かた）き心ぞ神のごと
戦へる今日と云（い）はずや
叢雲の敵（てき）を見つゝも。

反歌二首

敵艦（てきかん）のしばしば寄（よ）する海をしも
くつがへさずばやまじとぞ思ふ

ものゝふのいゆきかへらぬ雲かとも

神のごとくにおろがみまつる

ブーゲンビル空戦を讃ふ

臼田亞浪

菊晴れたりブーゲンビルの海の聲

ラバウルの雲血に染みて木枯す

南溟も夕焼けつらむ鷺子（ささこ）啼く

翼（つばさ）の戦果相つく晴れの鵲雀（もずすゞめ）

冬日炎（も）ゆ雷撃（らいげき）魂（こん）を身にし起（た）て

ブーゲンビル島沖の勝利を讃へる

中塚一碧樓

必勝神兵に星空あかりたり

連捷第何次までも冬日の神意也

冬菜畑に明らかに思ふ敵艦炎上す

野の冬の雲みな動いてゐる勝鬨あげる
大戦果この夜を端坐する爐のほとり

十一號二面

大東亞共同宣言を讀へて

岡麓

この國(くに)に參渡(まゐわた)り來て大東亞(あ)の國々(くに)に(く)ふるひ立つをち
かへり

日ののぼりもの明かに見ゆるごとかならずや勝つ正しきいくさ

明かに事みさだめて共(とも)に立つ國々(くに)に(く)一つことあげぞする

よこしまをしりぞけむには進(すす)め進(すす)めたたかひ進(すす)まむ五つの國は

大東亞(あ)力を合せふるひ立つはかり事しけり日本(にっぽん)にあつまりて

海を呑む威力

金子薫園

南方にそびらはむけじ神いますブーゲンヂヤの空(そら)をかしこみ

將軍勝ちて傲らずたふとき犠牲(ぎせい)の前になみだ光れり

大御稜威(つ)ただにかしこく皇軍の威力今や海を呑む

みいくさの尊(たふと)き犠牲(ぎせい)思ふとき眼(め)の前くらし大勝利(しょうり)
のかげ

大戦果(くわ)聞(き)くとき折からの心慄亢進(しん)の發作も去んぬ

十二號一面

詩人應徵

佐川英三

―九月二十五日〇〇製鐵所應徵戰士として入所―

はじめて眼(ま)のあたり鋼(はがね)の生れるのを見た。鐵(てつ)が鐵(てつ)となる
姿(すがた)を見た。

それは もはや 太陽(やう)に似た白熱(ねつ)の雫であった。

巨大な礦爐(くわうろ)の傍では

人々は神のやうに裸であつた。

美しく生れた鐵(てつ)は
つぎつぎに運ばれ
鍛えられ

無(む)の意志と腕(うで)とに固(かた)められて
一隻(せき)の船(ふね)になつて行つた。

遙(はる)かに想像(さうざう)を絶した尠大な鐵量(てつりやう)は
私の怠(たい)惰(たい)を春雷(らい)の如く叱咤した。

ノロ、ヅク、マンガン鑛。

平爐(ろ)、高爐(ろ)熱(ねつ)風爐(ろ)……

いろんなものを教(をし)へられそして覺えた。

未(み)明(み)から夜(や)半(はん)までの激(げき)務(む)にも堪(た)へられるやうになり
銹(さび)た鐵屑(てつくづ)の貴(たか)さも知(し)つた。

ペンをシヤベルに換(か)へて滿(み)二(に)ヶ月(げつ)。

あゝあの南海(なんかい)の空遠(とほ)く

わが詩(うた)よ。

一片(へん)の鐵(てつ)となつて羽搏(はねう)け。

十三號一面

戰勝祈願行

青柳龍樹

懷(くわい)中(ちゆう)に一(いつ)卷(まき)、志士(しし)の詩賦(しふ)。

軍服(ぐんぷく)に重(おも)き太刀(たち)さげ佩(ひ)きて相模野(さまの)を横(よこ)ぎり、

新春(しんしゆん)の寒(かん)頭將(かぶ)に丹澤(に)澤(さわ)に臨(りん)んで歩(あ)む。

あふり山(やま)ら峰(みね) 劔(けん)夫(ぶ)の如(ごと)く冬(ふゆ)空(そら)に聳(たか)えたり。

海(うみ)の戰(いくさ)、野(の)の戰(いくさ)。

大和民族(たいわ)族(ぞく)は今(いま)怒(おこ)れる不(ふ)動(どう)像(ざう)の形(かたち)装(ま)もて

地殼(ちがく)の上(うへ)につち立(た)ち上(あ)る。

凱歌(がいが)の嶺(たかね)に登(のぼ)りて必(かならず)勝(かち)を祈(いの)らん哉(や)。

山腹(さんぷく)に段(だん)々(だんだん)々(々々)々(々々)々(々々)々(々々)もみえたり。

辻(つじ)に地藏(じざう)石佛(せきぶつ)、禪(ぜん)せり。

山道(さんだう)に忠列(ちゆうれつ)陸(りく)軍伍長(ぐんぶ)の墓(はか)碑(ひ)も新(あら)し。

大陸（りく）に戦ひて散華（さんくわ）せる陛下（へいか）の赤（せき）子
今、故郷の民に墓碑（ぼひ）もて戦を語（かた）る。
梅の枝、馨り出でんとする蕾、
我が心激（げき）して野を歩き山に攀り、
戦勝を祈願（きぐわん）せんとす。

（軍事保護院獻納詩）

十三號三面

アジアの箜篌

永瀬清子

うるはしの日本島よ
そなたは奈（な）良の帝の御時の
あの優（いう）麗ならでんの箜篌にさも似てゐる
ふくよかに張（は）る弓なりの
半ばは雪に粧はれ半ばはあをい南東の風
山々にせゝらぎの音たえず
もえいづる草木の芽はうすくれない
をみな の 瞳はさらに澄んで
昔ながらにさとくしづかな影（かげ）をたゝえる
いざやわれらをみなごころを
琴（こと）糸となしてその上にかけてよう
いざやおのれなきおもひを
高く低（ひく）きそのしらべとりく
虹のごとくかけわたさう
この島の春早い花々の
きよいかをりにその歌（うた）をまじへよう
いまや男の子は大君のみことかしこみ
かへりみもせず海のかなたへいでて征く
たゝかへる男の子にも思ふ勿れと
われら誇（ほこ）らかに告（つ）げ云（い）はう
空にかがやく琴（こと）座のあるごとく
アジアに懸れるたてごとの
あけぼのいとおほらかに鳴りいでよう
その調べの遠（とほ）い波紋（はもん）は

かなたの國々をゆりさまさう
いさぎよく征きし人々を
いともやさしく肯づき笑ましめよう
うるはしの日本島を
われらが指もて

おのれなきをみなごころに鳴りわたらせよう

(軍事保護院獻納詩)

十四號二面

新春賦

岩佐東一郎

遅しい戦ひのあけくれに

いつか四十歳(さい)の春を迎(むか)へて

母と妻(つま)と五人の子らと

つゝましく明るく新年の座(ざ)につく

いま暁(げう)大常會を終(を)へて

隣(となり)組の人たちと氏神へ詣でれば

かがり火わが心のごとく

烈々(れつ／＼)と寒風の中に燃(も)えさかる

久々のゆとりよ

元日の日向にゐると

わが姿(すがた)一振りの古刀となつて

鋭(するど)い鏝(えん)鳴りがするやうだ

ラバウル防空の歌

陸軍病院 相良萬吉

一つだに戦ひならぬものぞなきラバウルの朝のものゝざわめき

一と歳の盲爆の機影見返へらで作業に急ぐ軍屬の群

麥畑を打返すごと盲爆の山肌赭くあらはれにけり

照空の太き光芒たじろがずラバウル島山淡くたそがる

高度二萬亂積雲の輝（かがよ）ひて病院の海今し夕風く
母を呼ぶ呻吟（うめき）の聲のあと絶えて椰子樹ほのぼの明け初めにけり。
早乙女のクレパスの書畫想はするラバウルの港忘れざらなむ

（筆者の筆名は長野競一郎、一昨々年夏應召、歴戦ののち病を得、現在熊本陸軍病院に療養中）

十五號一面

大東亞共同宣言を讃ふ

谷鼎

大東亞十億の民昂々（たかだか）とこぞりて宣（の）ぶる言（こと）のさやけさ
ただよへどおのづから成るものごとあなさやけしや一つと凝（こ）こる
あかときに稜威（いつ）の高軛（たかとも）ひびくなす心奮ひて聴く大言（こと）
いはや戸のあくる光にとどろしきし八百萬神（やほよろづかみ）おもほゆるかも
後の世は八百萬神の一人ぞとあかとき心（こころ）昂（たか）く奮ふべし

決戦の春

川上三太郎

決戦の春を捷つ艦運ぶ船
きつと勝つ一粒を頒け草嚙んで
松過ぎて火叩きしかと位置護る

今年

前田雀郎

新らしき年新らしき年とこそ
屠蘇（そ）の座（ざ）に今年はきのふ思はざる
命（いの）一つ今年の餅を食ひ得（え）たり

決戦の新春

相生笑菊

松三日勝利の年ぞ工場着

新春（はる）は獻納工場正しく機を必死
敵に勝つ増産日めくり新春（はる）とあり

十五號二面

決戦新春

大谷碧雲居

初御空いくさのほひ茜せり

いたゞきて破魔矢の白さ海を想ふ

一兒征旅に在り

松納戦線につゞく我家かな

伊東俊二

手にもちて破魔矢放つ心石の段々

詣でもどる道の霜の、しづかな決意である

決勝の年とて明けて降れば雪白く降る

新聞の太平洋地圖の廣さを、霜の白し今朝
月から白く散つてくる身にしみる聲をきく

松本たかし

鼓（こ）を打てば鳩がたち舞ふ弓始

強弓（つよゆみ）に降魔（ごうま）の一矢（いつし）弓始

見分（けんぶん）の神主さむし弓始

十六號一面

今古御船匠之祝歌

いまもむかし、みふねづくりの、いはひうた

南江治郎

天霧る雪に 色さむし
みどりの秀の枝 雪を呼び
中枝に風の わたる時
時雨るの下枝 根を蔽ふ

眞折のかつら 幾千代に
天つみ業を 祈りつつ
船に造りて 今おろす
召さるる松の めでたさよ

舳に恵比須 朗らかに
臚に大黒 笑ひつつ
楫は黄金の 臚を載せて
錦の帆綱 風をきる

玳瑁流れ 銀融けて
水や空なる 雪の虹
色そめわけて 送る瞳に
濤音高き 日のひかり

—軍事保護院獻納詩より—

旗
竹内てるよ

風にさからつて旗（はた）をたてる
旗（はた）さをは、霜（しも）につめたい。
あけそめた光の、新しい中に
目を伏せて松の緑（もり）をみつめ
さて、心静（しづ）かに旗（はた）を立てる
昭和十九年

この年をこのやうに平静（せい）に迎（むか）へて
朝風に 日の丸を立てる感謝（かんしゃ）
旗（はた）こそ なびけ！

今ははや 日の丸は決戦の旗（はた）

いつの日かこの旗（はた）を
戦勝（しよう）の 喜悦（きえつ）の中でこゝにこうして立ち
空（そら）を仰ぎ、心静（しづ）かに立てやう

いつの日か この旗（はた）を
風にさからつて

心清らかに萬感（かん）を胸（むね）にし
ゆつくりと 立てやう

森（もり）にこだまする彌榮（いやさか）の聲（こゑ）をきゝつゝ 勝利（しょうり）のよ
ろこびをもつて 立てやう
その日まで

まさしく その日まで
私たちはたゞ 行ふことを知（し）るのみである。

たたかひ遂げむ
笹井嘉一

大御稜威斯（か）くこそあれとみいくさの荒（あら）ぶり（やは）す年は來にけり
彌榮（いやさか）の松に添ふ竹しら梅の直（すぐ）に清（さや）かにたたかひ遂（と）げむ
決戦の年たつ今朝の雑煮餅一切（ひときれ）といへど身のちからなす

須臾の間
關 登久也

雪みだる山にのぼりて皇國（すめくに）の大勝（おほかち）いくさ吾（われ）祈（いの）ら
まく

悲願をば胸に秘（ひ）めつつ四十路（よそぢ）まり五つの年（とし）に吾奮ひたつ
須臾（しゆゆ）の間もわすれぬますらをの道をこの新年（にひとし）はゆきてくだけむ

十六號二面
起死回天の業
中野秀人

あなたの隻(せき)脚が
小さい杵となつて 地球(きう)の外皮を叩(たたく)く
わたし等は眠(ねむ)つてゐて 眠(ねむ)りのなかの戦場に行つてゐた
無(む)邊在(ざい)の彼方に結晶(しやう)するものが わたし等を引寄(よ)せてゐた
誰(たれ)か知(し)る―銃(じう)後(ご)にて戦死(し)すると言つたあなたの決意を!
むかし 建(けん)國(こく)の女神が降りていつた波(なみ)のなかの世界(かい)を あなたは
自由にした

あなたの机の上に菜(な)の花を挿し
今日正月六日の雪が降(ふ)つてゐる

わたし等 あなたの血(ち)に繋るわたし等一門の夢(ゆめ)は破(やぶ)れた
あなたは美しく 古武(ぶ)士のやうに 血(ち)の搖(えう)籠(かご)に乗(の)つて 飛(と)
んでいった

あなたの長刀は あなたを貫き 小さい血(ち)の溝(みぞ)を掘(ほ)つた
あなたの額(ひたい)は 巨(きよ)大な櫛(し)のやうに 歳(せい)の瀬(せ)に懸(か)つてゐる

あなたの記憶(きおく)は 菊(きく)花(か)と山茶花(さん)のなかに残(のこ)つてゐる

あなたは新しい世界(かい)の創(さう)意(い)をあなたのなかに求(もと)め

あなたの知(し)らないところ(ところ)に飛(と)んでいった
新春とは名ばかり 老(らう)母(ぼ)の膝(ひざ)は震(ふる)え 未(み)來(らい)の子供(こども)達(たち)に輸(い)血(けつ)
(ゆけつ)する

あなたの主座(ござ)は天涯(がい)にあり 勝利(しょうり)の旗(はた)と黒(くろ)い
馬車(ば)と木靴(き)の夢(ゆめ)を乗(の)せてゐる

わたし等 祖(そ)國(こく)を愛(あい)する者(もの)は 何(なに)をあなたに捧(ささ)げやう?
雪路(ゆきぢ)に氷柱(こおろぎ)を鳴(な)らし 起死(きし)回天(くわてん)の業(わざ)を約(やく)す

十七號一面

遺書

—マーシャル殉忠の靈に捧ぐ—

神保光太郎

身(み)は鴻(こう)毛(もう)よりもかるきか
然(さ)なり かるし
大君(だい)にささげしいのち
などて死(し)をおそれん

わが志 うごかじ

草葬もののふの道

純血（じゆんけつ）の歴史を守る

わが願（ねが）ひ うごかじ

死（し）す この孤島（こたう）に散（ち）る

わが望（のぞ）み残（のこ）るなし

なれど 明日の祖（そ）國を

うれひざらんや

生あらば

なほ百歳（ももとせ）の齡（よはひ）をかせ

祖（そ）國の彌榮（いやさみ）を知（し）りて

死（し）なましものを

はらへどもはらへども

寄（よ）せくる敵機

わが陣營（じんえい） 慘（さん）として

最後の秋（とき）は到りぬ

突（とつ）撃！

天皇陛下（へいか）萬歳（ざい）……

火

尾上柴舟

仇の火にくづれむものか年永くわが築きたる鐵（くろかね）の壁（かべ）

仇の血にわが守（も）る島の珊瑚礁色かはるまで撃ちて止まむ

海おほひ空おほひ來よ待ちとりて向火（むかひび）つけむその艦（ふね）に機（き）に

群れ來ともかの醜鳥（しこからす）何ならむ殲（つく）さでやまぬ隼（はやぶさ）の眼に

仇來れその機も艦も殲（つく）すべく胸の怒の炎（ほのほ）浴びせむ

十七號二面

出陣前夜

―すなはち昭和十八年二月七日深更―

濱田乃木

霜（しも）が降りるのであらうか
ひとしきり烈しく禽のむれが往き

じつに じいんとしてそよともきこえぬ。

わたしはひそかに

稚いものたちの寢（ね）息をよみながら

すでに父でないころに誓（ちか）ふ。

匂やかな

ぶよぶよのすいみつとうの頬（ほ）たち。

御明のかけにゆれて

奉公袋や

征くものゝ僅（わづ）かな品々をつゝしみてとりそろへる妻（つま）。

しかしこの神意と自信（しん）に鎧へる

みちたりたころに何をおもへといふ。

まなこをつむれば

この静（しづ）けさはまるでゆかしく。

われら常に不拔（ばつ）の精鋭にして

祖（そ）國の柱（はしら）たらんとこぞり

比類（ひるゐ）なき突端（とつたん）にすべてを投（とう）ぜん。

けふ

かつてみざる尨大なる祖（そ）國の冬を

冥々のうみをのぞみ南へ急（いそ）ぐもの

あゝわれら

ふたつはなきおん爲に參らせん

わたしは

稚いものたちの寢（ね）息をよみながら

すでに父でないころに誓（ちか）ふ。

十八號一面

マーシャルの勇士を讃ふ 栗原潔子

海をおほひ空を昏めて氷雨（ひさめ）如（な）し襲（おそ）ひ來にしを撃ちて死（し）に

き
かへりみなく思ひ極(きは)めし命(めい)なれば鬼(き)神のごとく撃ちて死にけむ
思ひあがり襲(おそ)ひ來し鬼(おに)ら邀へつともゆる怒りに堪(た)へずか死(し)に
けむ
六千のいのち死(し)すべく敵(てき)中にをたけびし聲(こゑ)がわが血(ち)に響(と
よ)む
神州(しゅう)のをのこの怒りたゞにかくとをたけびにつつ撃ちてし死(し)にけむ

トラック島護り固し

土岐善磨

四季(き)諸(しよ)島七曜(やう)諸(しよ)島ごとく皆(みな)火(ひ)を吐きて
敵をこそ摧(くだ)け
海を蔽ひて近づき來たる不逞の敵(てき)撃ち果すべき時は到れり
こざかしく數量(りやう)をたのみ來たる敵(てき)をここに邀へ撃ちかしこに追ひ撃つ
わが必勝(ひつしやう)の信念(しんねん)を増(ぞう)産の現實を突破(とつは)し來た
る敵(てき)あらば見む
海(うみ)に陸(りく)にわが子らも征きてすでに久し南の空を心に護(まも)る

屍を乗りこえて

—マーシャル戦死勇士に應へて

川路柳虹

屍(しかばね)を乗(の)りこえて、屍(しかばね)を乗(の)りこえて、
吾ら たゞ 進(すす)むのだ、進(すす)むのだ、
吾らの眼(め)は敵(てき)をのみ瞞める眼(め)だ。
鐵城(てつじやう)を頼(たの)み寄せ來る汝ら、
神州(しゅう)の怒り 思ひ知(し)れよ。
もはや吾らに銃(じゅう)後はない、
吾らの立つところ すべて前線、
吾らの町は城壁、吾らの家は砲壘(はうらい)、
吾らの窓(まど)はすべて銃眼(じゅうがん)となるのだ、
六千五百の英魂(えいこん)に應へるものは
血(ち)みどろの汗(あせ)と腕(うで)と力だ、

時を越えた魂の力の増(ぞう)産だ、武器(ぶき)だ、
吾らの背(はい)後にはアジア十億(おく)の民が控(ひか)へてゐる、
屍(しかばね)をのりこえて、乗(の)りこえてたゞ進(すす)むのだ、
太平洋(やう)を、アメリカ大陸(りく)を、東へ、東へ、
ワシントンに日章旗(にっしやうき)翻(ひら)るまで、
アメリカ合衆(しう)国を世界から抹殺する日まで、
屍(しかばね)をのりこえて、のりこえて進(すす)むのだ。
今日の光榮(えい)の爲めに生きてゐた吾ら、
莞爾(じ)として死地に即かう、
戦闘(とう)配置(はいち)終(おは)る、たゞ進むのだ、進むのだ。

マーシャルの勇士にさゝぐ

水原秋櫻子

梅を活け破魔矢さし添へ黙禱す
ものゝふの花の白梅香ぞたかき
梅かをり島守る銃火眼には見ゆ
雄叫びの春雷となりて耳朶をうつ
敵(おに)撃てと春の潮(うしほ)の鳴るをきけ

富安風生

報道に頭(かうべ)を垂れて梅かたし
くだけたる玉芽(たまめ)を悼み奉る
鋒(ほつるぎ)を土よりあげしもの芽あり
ものの芽の今こそぞる國の内
老木の芽もひしめきて恃もしき

萩原麥草

梅早く咲きぬマアシャルたゞかへる
梅犇々ゆふつゝのいくさ聞え來る
春潮の底來る仇も撃ちてやは
如月の夕、うな原の舂かな
死にのぞむ神兵まこと白き春

十八號二面

噫呼マーシャルの英魂

島元義輝

退(わりぞ)きしは敵(てき) アメリカと思(へ)ども艦(ふね)と機(き)とうせし神業(かむ
わざ)に哭(な)く
圖(づ)に乗(の)りてきたる小島に皇軍(みいくさ)の護りは固(かた)し撃たず止まめ
や
國難(なん)に赴(おもむ)くこころつきつめておのれをなしと思(い)へば安(やす)けし
國(くに)にこそぞり激(たぎ)つ思ひは言(こと)げず一日(ひとひ)一日(ひとひ)に悔(く)あらしむな
わが子(こ)らが腹(はら)へりたりといふきけば戦(いくさ)ひ勝(か)たむ秋(あき)はいまにぞ

珊瑚環礁の華

中村正爾

将(しょう)士(し)軍(ぐん)屬(ぞく) 六千五百(ろっせんごひゃく)ことごとく玉(たま)と碎(くだ)けて残(のこ)る一人(ひとり)無し
おもほえばと胸(むね)張(は)り裂(き)くマーシャルの此(こ)の大き(おほ)き仇(あだ)撃(う)たずば止(と)まじ
かならず撃(う)たで止(と)むべき南(なん)溟(めい)のクエゼリンの敵(てき)をルオット(ルオット)の敵(てき)を
珊瑚環礁(珊瑚環礁)岬(さき) (ちぬ)り果(は)てにし益(ます) 荒(あ)男(おとこ)の念(ねん)ひは繼(つ)ぎて報(は)らざらめや
太平洋(たいへいよう) (やう) 悠(ひさ)久(ひさ) (とは)の鎮(しづ)めと益(ます) 荒(あ)男(おとこ)や六千五百(ろっせんごひゃく)彈(たま) (は)せて還(かへ)ら
ず

犠牲とは

—マーシャル戦士の勇士に深謝して—

笹澤美明

私は壁(かべ) (へき) 間に張(は) (は) られた新聞(ぶん) (ぶん) を仰(おほ)いだ。
春(はる) 浅(あさ) (あさ) くとも垣(かき) (かき) には白(しろ)梅(うめ)が開(ひら) (ひら) き、
鶯(うぐいす)が春(はる)の歌(うた) (うた) を歌(うた) (うた) ひ驗(あま) (た) めしてゐる日(ひ)、
音(ね)羽(は)候(こう) (こう) の御(ご)瞳(とま) 嚴(げん) (げん) として閃(ひら)めき、
山(やま)田(だ)、秋(あき)山(やま)兩(りやう)將(しょう)の眼(がん) (がん) 光(ひかり) 又(また)、霜(しも) (しも) の如(ごと)く光(ひかり)る部(ぶ)屋(や) (へや) の中(なか)で、
却(かへ)つてその静(しず) (しず) (しず) けさのうちに私は
耳(みみ)に轟(とどろ) (とどろ) く鐵(てつ) (てつ) の響(ひび)と血(ち) (ち) の叫(さけ) (さけ) びを聞(き) (き) いた。

―クエゼリン・ルオツト兩島(たう)の守備(び)隊全員六千五百名戦死(し)す―
この報道の文字の裏(うら)に民族(ぞく)最大の努(ど)力と最高の犠牲(ぎせい)が拂
(はら)はれ、

鐵(てつ)と血(ち)とがこの世の地獄(ごく)の響を立て、
噴き上げられ、飛(と)び散(ち)るの感(かん)じた。

私は嘆じる、犠牲(ぎせい)とはかくも偉(ゐ)大なものかと。

かくして己のが骨灰(こつはひ)を祖(そ)國の花床(しやう)に沈(しづ)めて、
以(もつ)て民族(ぞく)永遠(えいえん)の開花を冀(こひねが)ふものだ。

ああ、犠牲(ぎせい)といふ言葉がこんなに大きな容量(ようりやう)を持つてゐるとは！
それは今、この瞬(しゆん)間にすら、

私達の住む國土をその掌の上に載(の)せ、

靜(しづ)かな茶碗(わん)や白梅(はくばい)や鶯(う)の歌(うた)や

總ゆる平安(あん)な生命(めい)を支へてゐるのだ。

私は襟(えり)を正し、改(あら)めて壁(へき)間の

見えない血(ち)に被(は)れた新聞(ぶん)を仰いだ。

十九號一面

銃後春秋

丹塚もりえ

あづさ弓(ゆみ)春(はる)はめぐりて

石ばしる垂水(たるみ)のわらび

南(みなみ)ゆくつばめかへりぬ

いとし子(こ)をかしこみ征(ゆ)かせ

山田(やまだ)守(も)る母(はは)が家居(いへ)に

金色(こんじき)に波(なみ)はかがよひ

たくましきいのちの夏(なつ)や

たたかひの勝鬨(かちどき)のこゑ

兒(こ)がうたふいさましきうた

風(かぜ)すずし妻(つま)が眉(まゆ)ねに

都(みやこ)への秋空(あきぞら)すみて

銀翼(ぎんよく)のあかき日輪(にちりん)

旋盤(せんばん)のうなりにむかひ

一途（いちず）なる乙女（をとめ）のひとみ
地（ち）にありて星（ほし）と匂（にほ）へる

聖戦（みいくさ）はありがたきかな

國（くに）生（う）みはさかなるかな

天（あま）きらひ雪（ゆき）は降（ふ）るとも

和（にぎ）御靈（みたま）やまとをみなは

をろがみて冬（ふゆ）を耐（た）へたり

『軍事保護院獻納詩』より

十九號二面

マーシャルの英魂に誓ふ

塚も動けわが哭くこゑは秋の風―芭蕉

能村潔

クエゼリンが碎かれた。

環礁（くわんせう）が、ベトンがじぐぎぐにくづれた。

ルオネットが焼かれた。

椰子林が、廠（しやう）舎がぶすぶすといぶつた。

火となつた巨（きよ）大な落磐（らくばん）が

燃（も）えるものを燃（も）しつくした。

津浪（つなみ）なす百千の發破が

碎けるものを碎き去つた。

あゝ、クエゼリン、ルオネットよ、

いかにも、おまへが碎かれて

日本領（りやう）土の一邊陣が劫めとられた。

なるほど、おまへが焼（や）かれて

われわれの眉にも火は散（ち）つた。

しかし碎いても碎かれぬもの、

焼（や）いても焼（や）かれぬものが、

その形態（たい）を超（こ）え、

その概念（がいねん）を絶して、

氣流（りう）のごとく、磅礴（ぼうはく）として

日本（につぼん）の津々浦々（つゝうらゝ）に満ちわたつたのだ。

個（こ）に遍（へん）満して、
つひに個（こ）に終（おは）らぬもの、
邊陣も邊土もない、

たゞ、一に歸（き）し、

至（し）高の中心にさゞげつくして顧（かへり）みぬ、

凜乎（こ）とした、崇（すう）高な思ひのみが

能く彼奴らの殘忍（ざんにん）に堪（た）へて、

鷄（けい）口を劈く牛刀づれと戦つたのだ。

原始（し）の様相（やうさう）を今に、

眞珠の貝のそれにも似て、

内に汐をたゞへ、

島（たう）嶼をかゝへた環礁（くわんせう）が、

天の、地のけぢめもない、焦熱（せうねつ）の、

叫喚（けうくわん）する風爐（ろ）と化（くわ）したのだ。

こゝでは、死（し）も生もない、

草むすいとますらない、

生々しい屍（しかばね）がそのまゝ、

戦ふ將士の楯（たて）となり、壕（がう）となつて、庇つてくれたのだ。

呼べど應へぬ電（でん）鍵のうへでは、

最後の一指（し）までが形をくづしたのだ。

ここでは、兵はつひに數であつた。この無念（むねん）をおもへ、

そして、その悲壯（ひさう）に哭け。

クエゼリンが碎かれた。

わが慟哭に天地も揺らぐ思ひだ。

悲痛（ひつう）が大南風なして眼（がん）前をかき暗（くら）す。

あゝ、クエゼリン、ルオネツトよ、

しかしそこでわれらは神々の姿（すがた）を仰いだ。

草莽（そうぼう）びとの倫（りん）理を、獻るふ者（もの）の潔らかな安らかさを見た。

生死（し）に先（せん）後なく、

日月に距離（きより）はない。

われら、風爐の花と散（ち）り、

いまだ収（をさ）めぬ骸を殘（のこ）して

神成りました百千の勇（ゆう）士に、

あらためて拜（はい）跪のまことを致（いた）し

みづからの『場』に、叱を決して、

たゞ、一念(ねん)、報復(ふく)を誓(ちか)ふばかりだ。
―二六〇四、二、三一―

二十一號一面

撃たでやは

(音羽侯の御戦死を畏みつつ)

伊福部隆彦

撃たでやは

撃たでやは

アメリカを

かの醜を

畏(かしこ)し 高光る 日の皇子の 御園(その)生の

御裔(なす) 御子(さへ)も

今(やか)も かの醜(う)の 痛矢(く)串(くし)

負(お)ひたまひ

御生命(みのち)を 海(わた)の涯(はて) 死(すぐ)しましませしとや

みたま われ

口(く)ひびく

は(じ)かみの

何(なに)日の日(ひ)か

忘(わす)れなむ

死(し)なむかな

死(し)なむかな

わ(が)ともよ

う(か)ららよ

鬼(おに)となり

神(かみ)となり

七(なな)度は 八(や)度も 生(な)れ來(き)て

撃(う)たでやは 撃(う)たでやは かの醜(う)を ア(ア)メ(メ)リ(リ)カ(カ)を

その骨(ほね)の 髓(ずゐ)を(ま)まで

打(う)ち碎(くだ)き

日(ひ)の下(した)に 彼(か)の族(う)ち(や)から(ら) あ(あ)ら(ら)ざ(ざ)ら(ら)む

そが日まで

二十三號三面

東亞進軍譜

野口米次郎

妖魔(ま)を拂(はら)ふ 曉鐘(げうしやう)の
亂(らん)打に覺める 大東亞(あ)
民十億(おく)の 進(しん)軍譜(ふ)
天に木靈し 虹を呼ぶ

易きを蹴つて 難(なん)に就く
知能(ちのう)を捨(す)てて 機(き)に生きる
死(し)生一如の 十字軍
大地を結ぶ 血(ち)染め雲

ああ澎湃と 湧き起る
八紘(くわう)爲宇(う)の 神つ風
虚空を御して 雄(を)叫びし
正義(ぎ)降(ふ)らして 土護(まも)る

偉(ゐ)なり壯(さう)なり 必勝(ひつしやう)の
奇瑞(きずい)起つて 醜(しこ)を斷つ
隨(ずゐ)神歸依(きい)の 天津(つ)業
撃ちて止まぬ 鐵(てつ)火軍
(軍事保護院獻納詩より)

美しい朝

井上多喜三郎

少(せう)年は座(ざ)を正して音讀(おんどく)をしてゐた
机の上には
軍裝(さう)の父の寫眞(しやしん)が飾(かざ)つてあつた
白い障(しやう)子(こ)にひびく

音讀(おんどく)のこえは美しい

見ると丈の高いたくましい男である
手にはかりに使ふ弓矢を持つてゐる
年は十七と答(こた)へた

少(せう)年の耳朵をうつはげしい弦(つる)の音

庭(には)の梅の花が
静(しづ)かに匂ひをこぼしてゐた

二十三號四面

蓄貯一路

川上三太郎

機(き)を送(おく)れその聲(こゑ)犇々と貯へる
貯蓄(ちよちく)一路(ろ)兵の心を心とす
貯蓄(ちよちく)一心一粒(つぶ)一莖(こ)蔓(つた)で錯(さ)しむ

貯蓄昂揚

本田溪花坊

顧(かへり)みて身(み)近(ぢ)に貯蓄(ちよちく)する餘裕
春宵(せう)一刻(こく)手仕事をして貯蓄(ちよちく)
信念(しんねん)は貫ぬき止まむ倍(ばい)貯蓄(ちよちく)

貯める心

前田雀郎

貯(ちよ)金帳(ちやう)膽(た)をねぶつた字(じ)が並らび
通帳(ちやう)の日附(ひつ)の中(なか)にある戦果(せんか)くわ
勝つこと(かち)の他に慾(よく)なき貯(ちよ)金帳(ちやう)
端(は)した金(かね)などいふまじ鋌(てい)一つ

勝ちぬかん心のひそと貯めてゐる

匪賊村
渡邊渡

村は獸類の棲家を想起せしめる枝も拂はぬ木の柵の中にあつた。
今は軍隊に平定されて炊（かしぎ）の業もなく、村内荒廢し、家々は貧しげだつた。
私達の軍用トラックを見て家の中から驅け出してきた子供達は、
門口に立つて物珍らしげに車上の私達日本人の顔を見てゐる。

祖父は馬賊、父兄は匪賊。

代々、他人の所有を剝奪する事を以つて生活を爲し、自ら蒔く事を爲さず、
自ら製作する事を知らぬ家系に生を受けた者たち―

原住満州民族か、はたまた移住漢民族か、私には確とは判別できぬがやはり等しく私達日本人に類似の人種相貌を呈してゐる奥地の村の子供達よ、

―君たち長じて、契つて父祖の業を繼ぐ勿れ、

―むしろ遡つて君達の世代に於いて、君達の家系に交（ま）じる原始遊牧民族の血の穢れを
洗へ。

と、

戸毎に並んだ精悍な、不敵な、平均を失つた、汚れた小さい顔の列にむかつて、
私は車上で、ありたけの聲でどなりつけたい衝動を感じた。

風は左の頬に砂ほこりをたたきつけて去つた。

ひとびとよ、

今こそ私は人類愛の情熱、私の皮膚を肉をたち割つて、隙間なく大地にむかつて發散するを
覺えた。

二十六號一面

ジャワのあけぼの

第卅九回海軍記念日を迎ふるにあたり、嘗てバタビヤ沖海戦の渦中にありて敵前上陸をなせし日のことども思ひ出でて感慨の新たなるものあり。その夜、われらジャワ作戦軍の大船團を護衛しありしわが無敵海軍は、敵の旗艦ヒューストン及びパースの二大巡洋艦、三驅逐艦、二潜水艦を忽ちに撃沈し、米、蘭、濠の聯合艦隊を全滅せしめ、輝かしき戦果を擧げたりき。
この一篇を賦して當夜を偲び、ジャワ裁定のあけぼのを新たに感銘するのよすがとなさむ。

大木惇夫

夜は明けぬ、海のかなたに
ほのぼのと現はれ來(こ)しは
くれなあと、緑(みどり)と、白と
いと深(ふか)き藍の彩(あや)いろ
薄(うす)闇をい吹き拂(はら)ひて
しづ／＼に泛びて來(こ)しは
これぞ、げに、ジャワのあけぼの。

醒めやらぬ珊瑚の礁(しま)の
さながらに天鷲絨(びろうど)まがふ
やはらけき緑(みどり)の木かげ、
うつつなき椰子の林の
背(そ)びらには茜(あかね)つく雲、
渚には寄(よ)するさざ波
一すぢの白を劃(かぎ)りて
たゆたへる瀾(かた)の青潮(あをしほ)、
正眼(まさめ)にしそれと見わきて
あまりにも和(なごや)かにあり
かの礁(しま)と 空と、かの水。

幾(いく)時の前のいくさの
血(ち)ぞ吼(ほ)えし修羅(しゅうら)ををさめて
嚴かに生(あ)れ來(こ)しもの
神(かむ)寂びしそのたたずまひ、
あな、さやけ、あはれ明るし
死(し)の境こえてぞ見つる
天地(あめつち)はげにも美はし。

凶夢(まがゆめ)はいづち消えしや、
うつつにや、かくある様(さま)は、
或(ある)はまた、かの世ならじか、
まこと、われ、生きてをありや
われとわが眼(まな)をあやしみ
かへりみて、己が裸身(み)に

毛の布を纏(まと)へるすがた
視て安し、われは在るなり、
激(はげ)しかる戦ひの間に
悔(くや)しくも、敵(てき)の魚雷(らい)を
ひたうけて、とどろに裂(さ)けて
沈(しづ)みゆく船(ふね)の舷(はた)より
飛(と)び入りて水のさなかに
漂(た)ひて重油(じゅう)をあびて
玉の緒(を)もたえだえなりし
うつそ身(み)は今も在るなり。

よきかなや、これのあけぼの
見は惚(ほ)れて時知(し)らぬ間(ま)に
東(ひむかし)の空(そら)にひろがる
桔梗色(ききょういろ)いよよあからみ
ややありて朱(あけ)に染まりて
綾(あや)雲(うら)雲(うら)の裏(うら)ゆ
日は出(い)でぬ、大(おほ)なる日は。

御光(みひかり)や、い吹き射(や)せる
大神(おほがみ)の生きの御息(みいき)の
古(いにしへ)ゆ今(いま)をつらぬく
いつかしの榮(は)えとも思(おも)へば、
皇孫(すめみま)の、日嗣(ひつぎ)の皇子(みこ)の
現(あき)つ神(かみ)、大君(おほきみ)たちて
進(すす)めます今日(けふ)のみくさに
勝ちましし榮(は)えの徴(しるし)の
ひたさまに身(み)にはこたへて
御民(みたま)われ、船(ふね)にひれ伏(た)し
をろがみて涙(なみだ)垂(た)れたり。
あな、うれし、かたじけなしや、
醜(しこ)にして御稜威(いつ)かかぶり
このジャワのあけぼのにして
新(あら)しきわれは生(あ)れたり。

軍艦三笠
前田夕暮

―海軍記念日に―

吾はもよ記念艦(きねんかん)三笠(かさ)のデッキより天氣晴朗(せいらいう)の空を仰ぎ
たるかも

敵(てき)前回頭(とう)の必殺陣(ひつさつぢん)は思ひつゝ東郷(がう)元帥(すゐ)
の像(ぞう)をおろがむ

わが旗艦(きかん)三笠(かさ)の主砲(はう)がぶちぬきし敵(てき)戦艦(かん)の鐵
板(てつぱん)はこれか

日本海(かい)の海溝(かい)かく沈(しづ)めたる敵艦(てきかん)スウオロフ、オスラビヤ、
ボロヂノあはれ

御民われ明治三十八年五月二十七日をとほに忘(わす)れざるべし

海軍記念日に寄す

佐藤佐太郎

ゆるぎなき勝ちの力のみなもとゝ輝(かざや)く今日を承け繼(つ)ぎにけれ
四十年まへの足る日に祖たちのかゞやきて居る戦ぞこれ

海(かい)軍の記念(きねん)日にして戦ひの鋭きに立つ心さやけし

あさらけき象徴を負(お)へる海(かい)軍をひたふるにして今日ぞたゝへむ

顧(かへり)みぬ猛きまことをひきゐたる海の軍はかぎりあらめや

海軍記念日に寄す

伊藤豊太

海を率(ゐ)て武將つぎ死(し)に戦ひの様相(さま)はかなしく奮ひたしむ

歳へだつ捷(かち)のその日の信號旗(しんがうき)皇國(くに)の興廢(こうはい)には
ためきやます

敵(あだ)の艦(ふね)火炎(ほのほ)を天(そら)へ浪(なみ)蒼き海に泛むを見なばき
はまる

そそがれし忠誠(ちうせい)の血(ち)にかの洋(うみ)は清らかなるよ醜(しこ)ほろぶ
べし

このいくさ勝つといきほむらぎもの心あふれて眞女子(まをとめ)らたつ

二十七號二面

海軍に捧ぐ

藏原伸二郎

潮騒（しほさい）のどろくきはみ
碧（あを）海のいやはてどころ
陽をうけてきらめく旗（はた）そ
おほいなる海のみいくさ

そのかみの岩楠ふねと
三千とせのながき時しも
わが氏族（やから）うみに生き來ぬ
雲と海やまと島根（ね）

八雲たつ天（そら）をかけりて
八潮吹くうみをくぐりて
國守の敵（てき）うつすがた
今さらに尊（たふと）しかもよ

されば知（し）る一億（おく）のたみ
ふねつくり弾おくらむと
朝夕にいさめるころ
きみがたえけふも泰（やす）けし

三十一號一面

噫サイパン島

窪田空穂

ま悲（かな）しさを憤ろしさ亂（みだ）れ合ひをさまるとせず昨夜（よべ）より今日（けう）
を
勢（いきほひ）は動きて止（や）まず今はとぞ後をたのみて盡（ことごと）死（し）ねる
サイパンの民は悲（かな）しめ我らまた然（しか）ぞすべけむ過（す）ぐして泣（な）かじ

合掌

臼井大翼

神業（かむわざ）にふるへて泣（な）きしうつそみのわが眼（め）いま泣（な）く皆（まな
じり）を裂きて

事過（す）ぎし南溟（みなみ）の方（かた）へ合はす掌（て）や青脈（あおみま）ふとく張（は）るさへ恃む
盧溝橋に事發（はじま）りて七周年（めぐり）その七月の七日忘（わす）れじ

總蹶起だ

悲報を聞いて

野口米次郎

總（そう）蹶起（き）だ、

總（そう）蹶起（き）だ、

叫（さけ）びは響光を渦巻いて、

國土を貫く、

嵐（あらし）だ、

燃（も）え上る熱（ねつ）火だ、

避（さ）けられない爆（ばく）發だ、

ああ、總（そう）蹶起（き）だ……

叫音（けうおん）の亂舞（らんぶ）は雲を作り、

雨を作つて、

一億（おく）一心の土壤（じやう）を打つ。

今何處に怯懦の虚圓を廻るものがあらう

何處に弱（じやく）者の甘味（み）を追はんとするものがあらう。

總（そう）蹶起（き）だ、

剛健（がうけん）の陣（ちん）だ、

誰（たれ）が無（む）意味（み）の土塊（くわい）、

牛屍となつて神を失望（しつぼう）させようぞ。

我等は敗（はい）北を蹴つて、

一億（おく）一心の鐵（てつ）鎚（づち）を振ひ、

東亞（あ）開春の門を開かねばならない、

敢然（かんぜん）として八紘（くわう）を往かねばならない。

ああ、總（そう）蹶起（き）だ

我等勝利（しよりり）の殿堂（だう）に突（とつ）入せねばならない。
總（そう）蹶起（き）だ、
無限（むげん）の鬪魂（どうこん）だ、
一死（し）泰國の發動だ、
我等太鼓（こ）と銅羅（どら）を打つて、
凱旋（がいせん）道路（ろ）一筋（すぢ）を、
墓地に走らねばならない。

玉碎のことを聞きて

高濱虚子

暑（あつ）くとも鐵（てつ）を溶（と）かすに至（いた）らざる
日赫奕（かくえき）夏木（なつき）夏草（なつくさ）奮（ふる）ひ起つ

人心は常に明朗を失はず。折柄旱天に慈雨至る。

慈雨の句を作る。（七月二十日）

人心（ひとごころ）常に朗らか喜（き）雨至（いた）る

一億（おく）の心凝りつゝ喜（き）雨至（いた）る

前線の將士に贈る

父老健に喜雨又至（いた）る安（やす）んぜよ

悲憤の歌

吉井勇

口惜（くちを）しき堪（た）へ難（かた）ければサイパンの空を睨（ね）めつつ齒（は）嚙

（が）みすわれは

攻め寄（よ）する寇（あだ）し撃つべく民みなを霹靂（へきれき）とならしめたまへ

サイパンの敵（てき）屠（ほぶ）る日を誓（ちか）ふとも祈（いの）るのみにて勝つと思ふ
な

サイパンの婦女を歌ふ

今井邦子

夢（ゆめ）の間も忘（わす）れぬ祖（そ）國日本と激（たぎ）つ思ひに子を率（ゐ）て婦（ふ）

女も

率（ひき）みたる子等に示すか皇軍の弾にこめ打つ大和心（やまとこころ）を
貯（ちよ）水池の爆（ばく）撃ありて幾日（いくひ）経（へ）し水欲（ほ）る子等を抱きて
母は

サイパン島全員戦死をきゝて
暁鳥敏

いかならむみ心ありて大神は皇土を敵（てき）にゆだねたまへる
かなしかも憤（いきとほ）らしかも新らしき皇土は敵（てき）にけがされにけり
神領（りやう）を浸せる罪（つみ）に神罰（ばつ）の加（く）は（へ）らるゝ日も近く來らむ

三十三號一面

壯嚴の夜

神保光太郎

精（せい）兵南海（かい）に死闘（しとう）し

敵機（ていき）皇土を窺ふてやまず

人心騒然（さうぜん）たりや

否（いな）否（いな）

この靜（せい）寂

この壯（さう）嚴

日（ひ）の本（もと）の空（そら）

銀河（ぎんが）悠（いう）久の流れ

神々の星のまばたき

英雄（えいゆう）民族（ぞく）の意欲は凝（こ）る

鬱然（うつぜん）の河（かは）

鬪魂（どうこん）の山脈（みやく）

今こそわれら

いのちを捨（す）てて

大詔（おほみこと）にこたへ奉るのとき

聽け

かの聲音

國土（こくど）永遠（えいゑん）の春

杳（とほ）くしてちかし

三十六號一面

護國の人柱

テニヤン・大宮の忠節

野口米次郎

數千の赤不動よ、

卿等身（み）を砲（ほう）火に託（たく）して、
天に上った。

我等は卿等の頌を知（し）らない、
ただ言葉を失（う）しな）つて、

卿等が報國の壯途（さうと）を見詰める。

テニヤン大宮は、

マリアナ防衛（えい）の中樞、

されど我等はその喪失（さうしつ）に

敵（てき）の勝利（しょうり）を見ない、

ただ彼らが匹夫の勇（ゆう）と、

冒瀆（ぼうとく）の逸やる虚榮（きよえい）を見るのみ。

ああ、護（ご）國の人柱よ、

卿等は身（み）を没（ぼつ）して、

永（えい）劫の大義（ぎ）に甦る、

卿等は中部太平洋（やう）を血（ち）染めして、

外夷（い）野望（やぼう）に防波堤（はてい）を築（きづ）いた。

我等は亂（みだ）れる怒濤（たう）に、

起てよの叫（さけ）びを聞（き）く、

屈（くつ）するなの喇叭高く響いて、

到悲願（たうひぐわん）の近きを知（し）る。

ああ、卿等の死（し）こそ、

我等の決意を益（ます）ます固（かた）め、

使命（しめい）いや榮（さか）えて不動ならしめる、

偉（ゐ）なり卿等の忠節（ちうせつ）よ。

三十七號一面

起て一億
西條八十

一、松美しく砂清き
三千年の神の國（くに）
來り侵すは何奴（やつ）ぞ
怒に燃（も）ゆる一億（おく）が
雄（を）叫び高く起つは今
二、敵勢（てきせい）いかに寄（よ）せ來とも
武器（ぶき）を待みの醜夷
弘安（こうあん）四年元寇を
笑つて海に沈（しづ）めたる
時宗（むね）の血（ち）は我に在り（以下略（りやく））

決戦の秋は來れり
三好達治

一、すめらみ國（くに）の興廢（こうはい）は
けふのいくさにかかりたり
あゝこのいくさ勝たずんば
祖宗（そそう）の國（くに）を如何せん
起て一億（おく）
決戦の秋は來れり
二、すめらみ國（くに）のもののが
血潮（ちしほ）にそめしけれないの
波（なみ）の音高し北海（かい）に
波（なみ）の音高し南海（かい）に
起て一億（おく）
決戦の秋は來れり（以下略（りやく））

勝つために
伊波南哲

ここには

旦那（だんな）とよばれ

親父とよばれ

先（せん）生とよばれる人たちが

一切のゆきがかりを棄て、

勝つために

たゞ勝つために

軍需（じゆ）増産に汗を流してゐる。

高級（きふ）飲（いん）食店（てん）の旦那（だんな）

魚屋（や）、鮭屋（や）、八百屋（や）の親父

袋物商、帽（ぼう）子屋（や）、洋服屋（やうふくや）の主人

夜（や）學（がく）の先（せん）生

詩（し）人、小説（せつ）家、音（おん）樂家などが

汗（あせ）みどろになつて

聖（せい）戰完遂（せん）のために頑張（がんば）つてゐる。

お、神聖（せい）な職場よ

信愛（しんあい）と協力の源泉（せん）よ

大和一致（ち）の温床（しやう）よ

勝ち抜（ぬ）くための足場が

こんなところから

ぢつくりと築（きづ）かれてゆく姿（すがた）を私は見た。

三十八號一面

神々の火

深尾須磨子

翼の神

今宵またいのちに火點して

祖國のみそらを征きたまふ

圓屋根なせる森の彼方

神々のたむろしたまふ軍港の

ありとおぼしく

一つ 二つ また一つ

月をあざむく發光體は

夜毎そのあたりより射しのぼるなり
星くづを綴りつつ
やがてうち離れたちて遠ざかりゆく
神々の火
かばかり美しく巨いなるいのちの火の
世にありや
生きとし生けるもの
闇ぬちに伏してそを仰ぎ
目と目見合す人のごとく
このひとときを
神神の火に觸るるなり
翼の歌にまもられて寝ぬる夜の
夢のすがしきよ
祖國の母のふところに
幼な兒のごと乳房まさぐり
ただありがたし
かたじけなしと涙して寝ぬるなりけり

空に戦へ
窪田空穂

航(かう) 空機(き) 足らざるゆゑの悲(かな) しびと口惜(くや) しみ耐(こら) へ一と
せを經(へ)ぬ
その半数(なかば) あらば足るをと口惜(くや) しべる航(かう) 空機(き) なり今は餘ら
む
悲(かな) しびを堪(た) ふるがままに湧き出でて溢(あふ) れむ力空に戦(た)か へ

秋雲の上
飯田蛇笏

十月三日、わが山國の空高く軍機によりて
現れたる飛行機をはじめて見る

天たかし 曳く飛(ひ) 行雲 眞(ま) 一文字

秋十月 雲間の機影(きえい) みえず迅し
めにはみえぬ 神兵秋を 天満驅る

空の口
富安風生

空の日の 徽章(きしやう)を胸にいそしみぬ
金輪際(りんざい) 衛る大空(ぞら) 秋高し
高澄める 神慮(りよ)の深(み)空(そら) 菊(きく)の秋

空の七人
中村草田男

嘗て我、級主任たりし教へ兒中、すでにOk・Ya・Ogは陸鷲、Sm・Sa・Os・Anは海鷲たり。

彼等七人を讃ふ句三つ

彼の秋天 七選良を得(え)たりしなる
秋七草 七青(せい)年は 天を死(し)守
日々に日々に 汝等(なれら)男子の 天高まる

敵はけだもの
苦山喜志子

高青(あを) 空征きて戦(たゝか)ふ神の子を我も持ちたりつくさざらめや
あめりかのけだものどもを海に空に畏はりかけて待(ま)てば久しき
けだものが翼を借(か)りて空おほひ攻めくるものかええしやこしや

決戦
今井邦子

ひさかたの空の決戦とふるひたつ我が敢闘(かんとう)の精神(こんろ)は見よや
陸(りく)に海に戦(たゝか)ひ勝ちし祖先(きや)たちの歴史(れきし)をもちて空に決

戦す

大空の決戦ちかし青年（わかもの）が海、山ゆかば更（さら）に空ゆかばと決めし血（ち）は鳴る

三十九號二面

秋

大木實

私の寢臺の隅に

忘れたままのシツカロールの罐

汗でただれた皮膚につけると氣持のよい

シツカロールの罐

あけると微かな匂ひがして

なかば使ひのこされたままの

眞白な こまかいその粉

罐のおもてに

ひらが と平假名で書いてある

この寢臺に

夢を結んだひとの姓であらうか

ひらが―

どんなひとであつたらう

どんな手功をたてたひとであつたらう

ああ 面影は知らないが

飛行帽をかぶつた眼差しと微笑が泛かぶ

飛行科搭乗員の夢を結んだ

寢臺の隅にのこされた このシツカロールの罐

軍艦〇〇にて

四十號一面

頌歌

深尾須磨子

―陣歿詩人のみ魂にさゝぐ―

“撃ちてし止まむ”との大御歌
うたひましつゝ
まつろはぬ仇ことむけ給ひし
神ながらの道をかしこみ
い征きいで征き
征きてのはてに還らずなり給ひし
おん身らは
まことよき久米の子の
よきみやび男にておはしき
詩心發するがまゝにうたひ 行ひ
彌猛心おもむくがまゝに仇を挫き
いまは護國の神となり給ひしおん身らの
かくもさやけいきさをしの
生けるしるしの
仰ぐだに貴し

詩神のみ名によりて
おん身らと結ばれし我等
今日しも設へしうたむしるに
追慕のまことを傾けて
おん身等のみ魂を迎へたてまつる
希くは世におはせし日のごと
莞爾として來りつどはせ給へ
希くは詩神のみまへに
いと高き頌歌をうけさせ給へ
“わが三千とせのみやびの道は
劔太刀研ぎ給ひこそ進むべし”
今し雷のごと我等のたましひをうつ
無韻のしらべの何ぞ厳しき
我等のいのちことに改まり
いよゝ詩精神を劔として
大和心のかぎり戦はむとのみ
誓ひまつる
希くは我等の胸に
消ゆることなき民族の炬火をおき

詩人我等をして

とこしへに東方の光とならしめ給へ

今ぞ決戦のさ中にて

おん身らを偲びまつる我等のおもひ

追憶も涙も

ひたすらに凝つて敵撃滅の焰となる

希くはみ魂の安らげく

御加護の永久に祖國の上に

我等の上に

あらしめ給へとのみ

早朝

大島修

いちめんの靄である

しつとりとほのあたたく

濡れけぶるビルや街路樹や

(黄金の裾をひるがひすプラターヌや)

未だ熟睡の夢から覺め切れぬ

京城の巷を

いちめんの靄である

いちめんの靄

靄のなかから影繪のやうに

往來する二人一人

多分何處かの工員だらう

胸の上に大きく鮮血を噴き散らした

應徴士のマークがある

それがどれも辨當箱を抱へて

(新聞紙に包んだ辨當箱の快きぬくもりよ)

いそいそと過ぎゆく 影繪

やがて南山の麓あたり

フランス教會の尖頭が

寂しくくつきり浮いて來る

やがて靄もはれるたらう

眞青に空もはれるたらう
日頃 いぎたない自分の生活が
急に異變を生じたきのふけふ
はれゆく靄のなかを朝まだき
くさぐさのこと去にし日のこと想ひめぐらしながら
靄のなかを
自分も何處へかいそぎゆく

四十號二面

入團の朝

金村龍濟

『掃地黄金出』の外庭に
水がきれいに打ちまかれ
『開門萬福來』の大門に
お祝ひ言葉がはればれと

『誓海魚龍動』は海ゆかば
『盟山草木知』は山ゆかば
古勇將の絶唱が幟に映えて
朝鮮瓦の屋根にはたはたと

少年の眉がすがしく開き
太平洋の黒潮を眼に湛え
はにかむ頬がいよ／＼紅く
朝陽をあびてにこにこと

神風特攻隊の捷報つゞく
深碧の空を海かと仰げば
私色かゞやく公孫樹の梢に
吉きかささがカチカチと

四十三號一面

吾れ神業を見たり

泉甲二

一月九日、白日の下B―二九爆(ばく)撃機(き)數編(へん)隊をなして帝都(ていと)に侵(しん)入(き)きたる
一瞬(しゆん)の神業(しんごふ)なりしみづからは爆ぜつゝを夷(や)を撃ちたまひける
自爆(じばく)(ばく)しつゝ火(か)を噴(ふ)かじめし神鷲(しんじゆ)(わし)の上(う)ゆく巨(こ)き翼(よく)を見たり
すめくのに天(あま)を護(まも)ると爆ぜにしを見しめ給(たま)ひし泣(な)(な)くに泣(な)かれず
青雲(せいうん)のいまは鎮(しづ)み(しづ)みのほろけしやこの眼(め)この額(ぬか)伏(ふ)しし泣(な)かゆ

四十三號二面

眞如の月

風木雲太郎

敵機(ていき)つひに郷土(きやうど)に來(き)る
昭和十九年八月十日の夜
折(せ)から北上(きたがし)する雨雲(あめぐも)にかくれ
わが故郷(こきやう)の空(そら)より火(か)の雨(あめ)そゞぐ
敵機(ていき)旋廻(せんかい)の執拗(しやくごう)なる爆音(ばくおん)
憤怒(ふんぬ)火(か)を吐(つ)き咆哮(ほうごう)する四圍(しゐ)の要塞(ようさい)
鬪志(とうし)滿(み)々(々々)部署(ふしよ)まもる決死(けつし)の戦友(せんゆう)
雨(あめ)を衝(つ)き雲(ぐも)を破(やぶ)つて炸裂(さくれつ)する
對空(たいくう)砲火(ぱうか)の見事(けんじ)なる火線(かせん)構成(けいせい)
故郷(こきやう)つひに戰場(せんじやう)と化(か)すや
男女(なんにょ)老幼(らうご)すべてこれ
郷土(きやうど)防衛(ぼうえい)に蹶起(けつぎ)したる大和(たいわ)の精銳(せいゑい)
忠誠(ちゆうせい)勇武(ゆうぶ)三千年(さんせんねん)の歴史(れきし)の響(ひび)
胸(むね)に高鳴(たかな)り血潮(ちゆうしやう)に燃(も)えて
凜烈(れんれつ)の戦氣(せんき)
故郷(こきやう)の山河(さんか)にひしとみちみつ
この夜風(よかぜ)はやく雨(あめ)を呼(よ)び
不遜(ふそん)の敵機(ていき)の推參(すいさん)に
雷神(らいじん)また怒(いか)り稻妻(いなづま)ひらめき
悽愴(せいせう)の殺氣(ころしき)妖雲(よううん)にみなぎる
さはあれど

雲間にのぞく月の光は美しきかな
戦雲たなびく故郷のあの嶺この岸
烈々の鬪魂たぎりながるれば
眞如の月は美しきかな

四十五號二面

北海

更科源藏

モン／＼の濃霧（のうむ）の奥（おく）から
吹雪の髪を逆（さか）立て
氷の牙をならし
聲でない聲で叫（さけ）び
億（おく）萬の波（なみ）が押（お）して來る

それに向つて幾（いく）代
端（たん）然と銅（どう）の胡坐を組み
道ない水平に道を求め
生きに生き抜（ぬ）き
かなはぬなどとはおくびにも出さず
波（なみ）の彼方に生死（し）はないと
煙管のガン首（くび）で爐縁を叩（た）く

海は大きく呼吹を呑み
不敵（てき）に黙つたと思ふと
モリモリと盛り上り
大きくゆれ
ゆれ返（かへ）つてくづれる

この海も岬の陰から舟唄（うた）が歸（かへ）り
素（そ）朴な夕固（が）が母の家にランプをともすと
波（なみ）はあどけなく口をあけて眠（ねむ）り
荒（あら）くて温い海の夢（ゆめ）を越えて
燦く星が漠（ばく）々の夜をかき分ければ
北は時空を絶（ぜつ）し物を思ふ

防備厳し
小田観螢

營（えい）門の寒（さむ）きひかりに入りてくる馬蹄壘々とますらをの列（れつ）
國ぢからおしかたぶけて艦造れ飛（ひ）行機（き）作れ糧（かて）はわきても
防空壕（がう）雪はねあげてふかければ碧落（らく）わきてきびしくぞ澄む
つるぎなすつらゝの寨にこもりゐてけはしきまなこ敵機（てきき）來ん空
氷點（てん）下監視（かんし）に立ちて日暮るれば青（あを）照（て）る星にまなこ冴（さ）
えくる

四十六號一面

焦土

前田夕暮

大君のみゆきましたる道のべの焦（しょう）土に涙ぐむいのら思へや
おぎろなき屍野が原をわが行きていのちのほむらわきたたむとす
民族（ぞく）は永へにして亡ぶなし屍野が原の天津（つ）日のかげ

四十六號二面

汪主席を悼む

南京第三回大東亞文學者大會

席上に於て朗讀

百田宗治

巨木殪る

巨人殪る

この日 吾等が血を分けし友邦

中國復興の盟主

汪主席 病に逝く

アジヤの甦る日

われらが民族興隆のこの朝

卒然としてこの訃を聞く

巨木殞る

巨人殞る

王道の大路、親を滅し

敢然救國の焰火掲げし人

身を以て民庶の歸趨を教へし人

ああ この日 この人殞る

げきとして天地聲なし

巨木殞る

巨人殞る

國父生誕の佳日を迎へ

正に秋日清爽

公孫樹の落葉隕なり

ああ この日 主席の遺骸こゝに還る

秋風雷殺

大いなる涙潸然として頬をつたふ

合掌 ただその雄闘を偲ぶのみ

巨木殞る

巨人殞る

されど先生の靈よ安んぜよ

われらの結束愈々固く

われらの覇業成るの日愈々近じ

その永遠に組まれし腕の上より

その静かなる眠りの上より

われらの暁は來らん

アジヤの偉大なる暁は來らん

願はくば先生瞑せよ

焼跡

張赫宙

焼け跡(あと)に居る人も通る人も悟り切った顔(かほ)だ。解つてゐるんだ。忍(しの)んで戦つて勝つのだ、それが復(ふく)讐ぢやないか。

車内で罹災（りさい）した母子を前に迸る涙（なみだ）を止め様（やう）がなかった。が、
焼跡（あと）に立つと憤（ふん）怒がめら／＼と燃え上った。

新しい釜（かま）が湯氣（ゆげ）を吹いた。婦が立つて地下壕（がう）へ入った。焼跡（あ
と）がしんと静（しづ）かだ。きつとかつよ、神がさう囁いた。二

ベルト

半田義之

彼は何時も参つた時、あの油の染み込（こ）んだ、ベルトの事を思ひ出す。そして『ベル
トのやうに強（つよ）くなれ』と自分にいふ。あれは打たれても、叩（た）かれても、負
けない感（かん）じだ。さうして又、相（あひ）手を擲つても相（さう）當なものだ。三

詩

浅野晃

焼野が原も春立てば

不二はかすみて見ゆるなり

天つ日かげの隅なさに

凜々しく咲きぬ梅の初花

菊岡久利

戦争（さう）のはげしい生活の中で

つまらんことに向ツ腹（ふく）の立つことがある

みんなも

おまけに自分までが

ぼやぼやしてゐるやうな氣がして
だが

そいつは違（ちが）ふ

同胞（ほう）を信（しん）ぜよ

同胞（ほう）はそれぞれ

一生懸命（けんめい）だ

戦闘（とう）に

生活に

運輸に

精（せい）神力に

怒りを敵（てき）に思へ

どんな小さな怒りの原因も

敵（てき）の畏だ

怒りを敵（てき）に向ける

いま敵（てき）はもつと苦しい

神経（けい）衰弱（すゐじやく）になつた方が

戦争（さう）の負けだぞ

○『文學報國』紙面通りに表記出来なかつた漢字一覽
契、負、望、興、文、巨、步、兜、寒、攀、空、隱、卷、絶、昂、害、銳、籠、覓、告、勞、
難、嘗、單、圍、収、様、戾、菱、要、争、眞、晴、冬、菜、犧、前、徴、咤、横、郷、懸、
良、盲、爆、輝、港、獻、産、強、霧、舳、黄、雜、瀬、夢、史、銳、響、磨、控、終、咲、
激、載、眉、靈、磅、礮、凜、慟、収、彦、園、朝、柵、珍、奥、割、發、散、彩、醜、圓、
春、屠、美、閨、乳、焰、歸、聞、込、輸

○詩人の生没年、出身地

尾崎喜八・おざききはち

一八九二年一月三十一日―一九七四年二月四日、東京出身、詩人

佐藤一英・さとういちえい

一八九九年―一九七九年、愛知県出身、詩人

山口誓子・やまぐちせいし

一九〇一年十一月三日―一九九四年三月二十六日、京都府出身、俳人

安藤一郎・あんどういちろう

一九〇七年八月十日―一九七二年十一月二十三日、東京出身、詩人

岡崎清一郎・おかざきせいいちろう

一九〇〇年九月十九日―一九八六年一月二十八日、栃木県出身、詩人

大木惇夫・おおきあつお

一八九五年四月十八日―一九七七年七月十九日、広島県出身、詩人

梶浦正之・かじうらまさゆき

一九〇三年―？、愛知県出身、詩人

千家元麿・せんげもとまる

一八八八年六月八日―一九四八年三月十四日、東京出身、詩人

谷馨・たにかおる

明治三十九年―、高知県出身

小笠原文夫、生没年不詳

鹿児島寿蔵・かごしまじゅぞう

一八九八年一月二十日―一九八二年八月二十二日、福岡県出身、歌人

江間章子・えましようこ

一九一三年三月十三日―二〇〇五年三月十二日、新潟県出身、作詞家、詩人

竹村俊郎・たけむらとしお

一八九六年一月三日―一九四四年八月十七日、山形県出身、詩人

劉寒吉・りゆうかんきち

一九〇六年九月十八日―一九八六年四月二十日、福岡県出身、作家

深尾須磨子・ふかおすまこ
一八八八年十一月十八日―一九七四年三月三十一日、詩人、作家
豊田三郎・とよださぶろう
一九〇七年二月十二日―一九五九年十一月十八日、埼玉県出身、小説家
井上康文・いのうえやすぶみ
一八九七年六月二十日―一九七三年四月十八日、神奈川県出身、詩人
星野麥人・ほしのばくじん
一八七七年四月十三日―一九六五年三月十二日、東京都出身、俳人
市川御舟・いちかわみふね、生没年不詳
臼田亞浪・うすだあろう
一八七九年二月一日―一九五一年十一月十一日、長野県出身、俳人
中塚一碧樓・なかつかいっぺきろう
一八八七年九月二十四日―一九四六年十二月三十一日、岡山県出身、俳人
岡麓・おかふもと
一八九九年三月三日―一九五一年九月七日、東京出身、歌人
金子薫園・かねこくんえん
一八七六年十一月三十日―一九五一年三月三十日、歌人
佐川英三・さがわえいぞう
一九一三年九月四日―一九九二年十一月二十二日、奈良県出身、詩人
青柳龍樹・あおやぎりゆうじゅ、生没年不詳
永瀬清子・ながせきよこ
一九〇六年二月十七日―一九九五年二月十七日、愛知県出身、詩人
相良萬吉・さがらまんきち、生没年不詳
岩佐東一郎・いわさとういちろう
一九〇五年三月八日―一九七四年五月三十一日
谷鼎、生没年不詳
川上三太郎・かわかみさんたろう
一八九一年―一九六八年、東京出身、川柳作家
前田雀郎・まえだじやくろう
一八九七年三月二十七日―一九六〇年一月二十七日、栃木県出身、川柳作家
相生笑菊、生没年不詳
大谷碧雲居・おおたにへきうんきよ
一八八五年―一九五二年、岡山県出身、俳人
伊東俊二・いとうしゅんじ、生没年不詳
松本たかし・まつもとたかし
一九〇六年一月五日―一九五六年五月十一日、東京出身、俳人

- 竹内てるよ・たけうちてるよ
一九〇四年十二月二十一日―二〇〇一年二月四日、北海道出身、詩人、小説家
筏井嘉一・いかだいかいち
一九九九年十二月二十八日―一九七一年四月二十一日、富山県出身、歌人
関登久也・せきとくや
一九九九年三月二十八日―一九五七年二月十五日、岩手県出身、歌人
中野秀人・なかのひでと
一九八八年五月十七日―一九六六年五月十三日、福岡県出身、詩人、画家
南江治郎・なんえじろう
一九〇二年四月三日―一九八二年五月二十六日、京都出身、詩人
神保光太郎・じんぼこうたろう
一九〇五年十一月二十九日―一九九〇年十月二十四日、山形県出身、詩人
尾上柴舟・おのえさいしゅう
一八七六年八月二十日―一九五七年一月十三日、岡山県出身、詩人
濱田乃木・はまだのき、生没年不詳
栗原潔子・くりはらきよこ
一九八八年二月五日―一九六五年二月十六日、鳥取県出身、歌人
土岐善麿・ときぜんまる
一八八五年六月八日―一九八〇年四月十五日、東京出身、歌人
川路柳虹・かわじりゆうこう
一八八八年七月九日―一九五九年四月十七日、東京出身、詩人
水原秋櫻子・みずはらしゅうおうし
一八九二年十月九日―一九八一年七月十七日、東京出身、俳人
富安風生・とみやすふうせい
一八八五年四月十六日―一九七九年二月二十二日、愛知県出身、俳人
萩原麦草・はぎわらばくそう
一八九四年―一九六五年、俳人
島元義輝・しまもとよしてる、生没年不詳
中村正爾・なかむらしょうじ
一八九七年六月一日―一九六四年四月五日、新潟県出身、歌人
笹澤美明・ささざわよしあき
一八九八年二月六日―一九八四年三月二十九日、神奈川県出身、詩人
丹塚もりえ・につかもりえ、生没年不詳
能村潔・のむらきよし
一九〇〇年一月二十一日―一九七八年七月二十五日、詩人
伊福部隆彦・いふくべたかひこ

- 一八九八年五月十二日―一九六八年一月十日、鳥取県出身、詩人
野口米次郎・のぐちよねじろう
一八七五年十二月八日―一九四七年七月十三日、愛知県出身、英詩人
井上多喜三郎・いのうえたきさぶろう
本田溪花坊・ほんだけいかぼう、生没年不詳
渡邊渡・わたなべわたる
一八九九年―一九四六年、愛媛県出身、詩人
前田夕暮・まえだゆうぐれ
一八八三年七月二十七日―一九五一年四月二十日、神奈川県出身、歌人
佐藤佐太郎・さとうさたろう
一九〇九年十一月十三日―一九八七年八月八日、宮城県出身、歌人
伊藤豊太・いとよたと、生没年不詳
藏原伸二郎・くらはらしんじろう
一八九九年九月四日―一九六五年三月十六日、熊本県出身、詩人
窪田空穂・くぼたうつぼ
一八七七年六月八日―一九六七年四月十二日、長野県出身、歌人
臼井大翼・うすしたいよく
一八八五年二月二十八日―一九四七年四月二十三日、千葉県出身、歌人
高浜虚子・たかはまきよし
一八七四年二月二十二日―一九五九年四月八日、愛媛県出身、俳人
吉井勇・よしいいさむ
一八八六年十月八日―一九六〇年十一月十九日、東京出身、歌人
今井邦子・いまいくにこ
一八九〇年五月三十一日―一九四八年七月十五日、徳島県出身、歌人
暁鳥敏・あけがらすはや
一八七七年七月十二日―一九五四年八月二十七日、石川県出身、僧侶
泉甲二・いずみこうじ
一八九四年八月三十一日―一九八〇年十一月十日、福岡県出身、歌人
西條八十・さいじょうやそ
一八九二年一月十五日―一九七〇年八月十二日、東京出身、詩人
三好達治・みよしたつじ
一九〇〇年八月二十三日―一九六四年四月五日、大阪府出身、詩人
伊波南哲・いばなんてつ
一九〇二年九月八日―一九七六年十二月二十八日、石垣島出身、詩人
飯田蛇笏・いいただこつ
一八八五年四月二十六日―一九六二年十月三日、山梨県出身、俳人

- 中村草田男・なかむらくさたお
一九〇一年七月二十四日―一九八三年八月五日、愛媛県出身、俳人
苦山喜志子、生没年不詳
大木實・おおきみのる、生没年不詳
金村龍濟、生没年不詳
風木雲太郎・かざきくもたろう
一九二一年十月二十五日―二〇〇七年十二月二十三日、長崎県出身、詩人
更科源蔵・さらしなげんぞう
一九〇四年二月十五日―一九八五年九月二十五日、北海道出身、詩人
小田観蜚・おだかんけい
一八八六年十一月七日―一九七三年一月一日、岩手県出身、歌人
百田宗治・ももたそうじ
一八九三年一月二十五日―一九五五年十二月十二日、大阪府出身、詩人
浅野晃・あさのあきら
一九〇一年八月十五日―一九九〇年一月二十九日、石川県出身、詩人
菊岡久利・きくおかくり
一九〇九年三月八日―一九七〇年四月二十二日、青森県出身、作家、詩人
張赫宙・ちようかくちゆう
一九〇五年十月十三日―一九九七年、朝鮮慶尚北道出身、作家
半田義之・はんだよしゆき
一九一一年四月二日―一九七〇年八月二日、神奈川県出身、小説家

- 一 仮定的に転記した字句、夕擬(ゆうごり)
二 「短文」という小見出しが『文學報國』上に表記されている。
三 「短文」の小見出しあり。